

消えゆく前に

ウィーンの〈森〉の物語



「ウィーンの森の物語」

この題名は、つい考え込むことになる。

ヨハン・シュトラウスのそれは、美的憧憬。

エデン・フォン・ホルヴァートのそれは、美的憧憬の解体。

ウィーンの知的世界に憧れ、
ささやかな仕事をさせていただいた、

ある社会学徒の覚書。

フィールドとアーカイブ

—社会理論と経験的社会研究

タルコット・パーソンズ後 50 年

あるいは、ある大学教員人生

森 元 孝



目次

1. 『社会的行為の構造』との出会い
2. 構造－機能主義と地位－役割理論
3. アルフレート・シュッツとの出会い
4. ドイツ語圏への関心
5. 大学院に入って
6. ウィーン遊学
7. ユルゲン・ハーバマスと社会調査
8. 学会と研究会
9. 「緑の人々」と
池子米軍家族住宅建設反対運動
10. 『アルフレート・シュッツのウィーン』
11. ドイツ・日本社会科学会
12. 東京都知事選挙と民主政
13. 長期信用銀行制度と貨幣発行自由化論
14. ジョイント・セミナー
15. アルフレート・シュッツのつながり
16. 媒体「身体」「言語」「人」
17. 『石原慎太郎の社会現象学』
18. フル・オンデマンド講義
19. 社会調査実習
20. 演習とゼミ
21. 大学院研究指導
22. 『ヴェーバー後、百年』

23. 認識批判と分析理論

24. 卒業論文とゼミ論文

25. 私立大学教員

26. 高校時代をふりかえって思うこと

27. 心より感謝をこめて

別表 担当した「卒業論文」と「修士論文」

「社会に出る」「社会人になる」とは、そもそも「社会」とはという、物心ついた、おそらく誰もが抱く問い。私もそう問うたひとりだった。

そう思った 1970 年代から半世紀。著名な研究に遡求し、今を観察しながら半世紀。

その間、「社会」そのもの、「人」そのもの、そしてそのつながりが、決定的に変化していった。

アーカイブに事実を探究し、フィールドに事実を追究し、分析、理論にしていく永く続けてきた方法が、これからもありうるのかも分からぬ「社会」となってしまった今かもしれない。

終着に近づき、たいへん僭越ではあるが、たくさんの人たちに教えられながら、「社会」をめぐるって問うてきた事ごとを辿り記しておきたい。

1. 『社会的行為の構造』との出会い

1975 年早稲田大学教育学部社会科学専修に入學した。社会科学専修のカリキュラムは、「外交

史」、「経済原論」、「経済史」、「政治学原論」、「政治思想史」、「法学概論」、「社会学概論」、「財政学」、「社会政策論」などが年次進行の必修科目となっていて、それが受験生のとき、志望校のひとつとして選んだ理由であった。

2年生のときに、著名な寿里茂先生の「社会学概論」を受講していたが、当時、社会学について、私のイメージとは合わなかった。

ただし、貴重な思い出は、15号館102という大教室。大きな教室であり、後ろの方は、遅れてきた学生、途中で出ていく学生がおりの状態。ある時、先生は、「ここは映画館じゃないぞー」と怒り出された。マスプロ大学、大教室とはこういうことかと思った。

後年、先生とは著書のやりとりがあったが、当時は、少し敬遠することとなった。

3年になって、講義科目「社会学研究」、テーマは行為論。そこで、担当の丹下隆一先生は、行為の一般理論というものがあることを教えてくださった。

社会学で卒業論文をまとめようということで、12月、卒業論文指導教員は迷わず丹下先生を選び、希望がかなった。最初の面談で、パーソンズ『社会的行為の構造』（木鐸社）（*The Structure of Social Action -A Study in Social Theory with Special Reference to A Group of European Writers, McGraw-Hill 1937.*）を精読し、その大著を要約したものを卒業論文とすることが決まった。

学問の歴史に金字塔のようにある著作の内容を圧縮し、これを読めば、もう原本に遡求しなくてもよい、そういう作品を作るということになった。

それ以後、邦訳が進行中だったが、まだ全5冊中2冊が出たところであつたので、原書を徹底的に読むことから始まった。並行して、すでに邦訳のあつた『社会体系論』（青木書店）、『行為の総合理論をめざして』（日本評論社）など、詳細緻密にパーソンズを学んだ。



1937 年刊行の『社会的行為の構造』の主旨は、行為の一般理論を構築するということであった。自然科学のみならず社会科学においても経済学が、科学性を主張するパラダイムを提示し始めた時代。

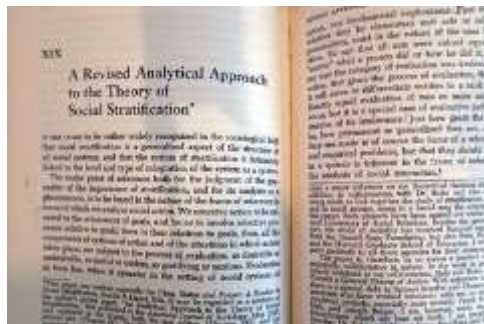
とりわけ、パーソンズの業績にあるマーシャル、パレートに拘りながら、ヴェーバー、デュルケムを考えた。ほぼ同時期のケインズ『雇用、利子、貨幣の一般理論』にいう一般理論が、社会学においてどのように可能かという問題であった。

2. 構造—機能主義と地位—役割理論

時は、パーソンズが掲げた「構造—機能主義」全盛時代から少し陰りが出始めていた頃。学説史で

知られているとおり、1937 年の『社会的行為の構造』では、この主義への展開はない。そうではあったが、その時代、信奉者の多かった「構造—機能主義」、その基本枠組である「文化的価値と地位—役割」の配置関係、それをもとにした社会成層の経験的研究についても関心を持った。

同時に、『社会的行為の構造』で提示されようとしていた行為の一般理論が、実は、そんな程度のものが成果、結論なのかという疑問があった。「文化的価値」と称して、日本社会のそれ、アメリカのそれ、ドイツのそれとして、わかったようでわからない「文化的価値」という言葉を怪しんだ。時は、「日本人論」全盛の時代でもあった。



日本での、この領域での代表者は、東京大学の

富永健一先生であり、先生の著作を大いに読み学んだ。しかしながら、いわゆる「社会階層・社会移動の研究」、とりわけ主要な三要素（職業、所得、学歴）で地位役割を位置づけていく、言うなれば大変オーソドックスな構成には、それは不平等関係の後付けではないかと、あまり興味がなかった。

第一次産業従事者が減少し、いろいろな種類のサラリーマンが増えるというのも、そんなことは、発見でもなく、みんな知っていることだろうという思いがあったし、「所得」は扱うが、「資産」は調査でデータを得るのは難しいと、当初から外されており、そこに問題とすべき本質が問われているのかという思いが、今の今に至るまである。

3. アルフレート・シュッツとの出会い

1978 年、卒業論文をまとめていた 10 月、日本橋の丸善でスプロンデル編纂の『アルフレッド・シュッツ タルコット・パーソンズ往復書簡』(Alfred Schütz, Talcott Parsons, *Zur Theorie*

sozialen Handelns, Suhrkamp 1977.)を見つけ、とりわけシュッツが、『社会的行為の構造』を要約しているところを知り、私の卒業論文の作業が、いとも簡単にまとめられているのに驚いた。



シュッツについては、その年度、下田直春先生（立教大学教授）の講義「社会学方法論」において、先生の著作『社会学的方法の基礎』（新泉社 1978 年）を教科書に学んでいた。この講義、年度末試験、シュッツについてよりも、パーソンズについて大いなる評価をした。

パーソンズに従えば、ライオネル・ロビンスの経済学の前提、自立し合理的に行動する経済諸主体の世界について、パーソンズはそれを原子論と批判していたのだが、そのロジックを、シュッツの理論を

評価する場合にも受け売りした。

パーソンズ側に立った評価であり、結果、この成績は、「可」であったし、たまたま友とフラメンコを観に行って、答案返却の最終回を休んだら、「森はどこにいる」と、凄い剣幕で言っていたぞと、後にマルジュ社に一時勤めた古川くんに、「マジで書くから、先生、お冠りだったぞ」と朱だらけになった答案を代わりにもらってきてくれた。

下田先生は、早稲田大学第一文学部、大学院文学研究科で社会学を修めた、典型的な早稲田マンでもあり、出会いはショッキングなハプニングであったが、その後、私が研究者の道に進んでからは、永年にわたって可愛がっていただいた。

後年、ロビンスが、オーストリア学派経済学、とりわけミーゼスの経済理論のイギリスでの代弁者だと知った。オーストリア学派は、パーソンズにとっては原子論なのかと思い、オーストリア学派とはそもそも何なのかと興味を持った。

4. ドイツ語圏への関心

早稲田大学で学んで、有難かったと思うことは、丹下隆一先生との出会いとともに、語学教育研究所のドイツ語入門を子安美知子先生に教わったことである。

テープレコーダーの時代であったが、なるほど語学とはそういうふうに学ぶのだと大きな体験をした。そして、夏の合宿、そこで生涯の友人となる人に出会った。フレール・ヴェスさん、当時、東京大学に留学中で、ネイティブスピーカーのアルバイトで合宿に参加されていた。

宗教社会学がテーマで、石川県能登半島合鹿をフィールドに、浄土真宗とその宗教意識調査を、博士論文にと進められていた。今ひとり、同級のマンフレート・リンクホーファーさん（当時、大阪大学大学院留学、後に大阪産業大学教授）にも出会い、被差別部落についてフィールド調査をされているのを知った。



社会科学は、理論と経験的研究を同時にやっていることが必須。富永先生の社会階層・社会移動研究もまさにそういうことだと納得した。

卒業論文を執筆していた、1978 年秋は、ヴェスさんを誘って、ドイツ語クラスの仲間たちと追分セミナーハウス（現・軽井沢セミナーハウス）で自主ゼミ合宿を催した。卒業後ソニー入社、激動の時代、長くニューヨーク駐在をしていた清水宏之介、みすず書房社長となる守田省吾ら、たいへん優れた人た

ちと学ぶ場を作った。



第二次石油ショックであり、就職解禁は、4年生の11月であった。父が、転勤族のサラリーマンであったこともあり、たいへん偉くなっていったが、違う道をと思い、大学院に進学しようと決めていた。

と同時に、当初は、パーソンズでありアメリカへと計画をしていたが、にわかにドイツ語圏に、とりわけヴェスさんのおられるウィーンへという思いが強くなった。

ちょうど、1977年秋、日本赤軍による日本航空機ハイジャック事件が起こる。福田赳夫内閣は、命は地球より重いとし、犯人の要求を呑み国内に収監されているテロリストを解放し16億円の身代金も

渡すという事件が起こった。

そしてその2週間後、ルフトハンザ・ドイツ航空機ハイジャックという類似の事件が発生。ヘルムート・シュミット首相は、緻密な計画を立てつつ、時間稼ぎをしながら、ソマリアのモガジシオ空港で、**GSG9**という特殊部隊を投入し、テロリスト全員射殺、乗員乗客無事救出という離れ技を行った。ニッポンとドイツは、何が違うのかという問いが湧いてきた。

また、1978年オーストリアは、国民投票で、建設中のツヴェンテンドルフ原子力発電所の建設を中止し原子力発電を使用しない政策を決定した。この出来事も、新鮮であった。

1979年1月私学会館で、タルコット・パーソンズの講演会が催された。その前年、関西学院大学に招聘され講義をされていたパーソンズ、その来日を機会に東京でも催されたのである。富永健一先生が司会をされ、目黒依子先生が通訳をされ、質問者に直井優先生が立たれ、なるほどと感じ入ったのであった。『思想』（岩波書店 3月号）には、パーソンズ

ンズと富永先生の対談が掲載されており、これも熟読した。

5. 大学院

1979年4月、大学院に入学した。その3月、入学試験があったのだが、試験教室で緊張して始まるのを待っていたら、隣に座った受験生、女性だったが、「すみません、時計を忘れてしまったので、時計を机の間に置いてくれませんか」と頼まれたのだった。

今であったら、ありえないハプニングに遭いつつ合格した。論述試験の問題は、「客観性と価値関係づけ」についてであった。

マスプロ教室がなくなり、少人数の演習での議論を期待していたが、まず感じたこと、それは一緒に入学した多くが感じたことだろうと思うが、「シュツ、シュツ」と、同学年の、のちにエスノメソドロジーの代表的研究者となる山崎敬一（埼玉大学名誉教授）、先輩で、のちに社会理論学会を創設する西原和久（名古屋大学名誉教授）、すでに新潟大学

に赴任していた那須壽（早稲田大学名誉教授）らが、異口同音に唱えていることであった。これには、いささか閉口した。

ひとつ面白かったのは、指導教授の秋元律郎先生の演習で、先生の御著書『日本社会学史』（早稲田大学出版会 1979 年）が刊行されて間もなくであったこともあり、日本社会学史を大いに学ぶことができた。

その初回、私の報告は、米田庄太郎『現代智識階級と成金とデモクラシー』であり、これは現在に至るまで、極めて重要な出会いであった。

作田啓一『価値の社会学』、そしてロバート・ベラー *Tokugawa Religion* も報告した。これらは、パーソンズとの関係でもあり、構造があり、そこにどう個人、集合体が編成されているのかという「文化的価値と、地位－役割の関係づけ」というオーソドックスな理論のロジックであり、このことを改めて辿ることになった。

もうひとつためになったのは、長田攻一先生、坂

田正顕先生（ともに早稲田大学名誉教授）が担当されていた第一文学部の社会学実習を、ティーチング・アシスタントとして手伝わせていただいたことだった。

「大学生の社会意識」について、学部比較をすることができる設定で、大きな授業を選び、担当の先生にお願いして集合調査をするものであった。分析結果は覚えていないのだが、当時は、まだ手集計をしていた。これは今から思うと驚く。電卓も高価な時代であった。

それと、集合調査が引き起こした問題である。授業の一部をあてて調査に協力していただくということで、票は集まるのだが、授業そのものではない。結果、お願いしていた先生が、授業ができない、長すぎると怒りだしたのであった。

元オリンピック選手でもあり有名な先生であったが、授業も毎回、精密にきっちり、まさに秒単位で進められている、そういう講義があるのだと改めて感心した。理論経済学の講義であった。

そんなとき、東京大学正門近く福本書院で、ハーバマスとルーマンによる『社会理論か、社会テクノロジーか』(*Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie -Was leistet die Systemforschung?*, Suhrkamp 1971.)という書と出会った。

直感的に、ハーバマスは、構造－機能主義を批判するも前提にしているが、ルーマンは、社会システム論と言いながら、構造－機能主義は誤りだとしており、新しい発想で社会システム論を始めていると理解した。

パーソンズ以降という関心で、ふたり、とりわけハーバマスを軸に学んでいくことにした。

6. ウィーン遊学

修士1年を終え、ウィーンへ留学ということで準備していた。

海外で生活どころか、飛行機にも乗ったことがなかった私は、どんな生活となるかも、あまり想像せ

ず、ただただ素朴に専門のことしか考えていなかった。

一橋大学の良知力先生のお仕事を知りながら、三月革命以降のオーストリア、そして 20 世紀初頭から展開するオーストリア・マルクス主義に大いに心が向いた。

これにより、ハーバマスとマルクス主義、フランクフルト学派とネオ・マルクス主義ということも主題とすることができ、さらに、そこでのオットー・ノイラート、ポール・ラザースフェルトの位置も興味深いと無邪気に考えていた。

都立家政の下宿を片付け、両親と弟の住む武庫之荘に戻り、母親の車で荷物を運んでもらい伊丹空港へ。何とも有難いことに丹下先生が見送りにおいでになっていた。

伊丹空港から成田空港を経由して、アンカレッジ、ハンブルク、シュツットガルトを経てウィーンに着いた。ヴェスさんが、優しくもシュヴェヒャート空港に迎えに来てくださっていた。

だが、ある程度までドイツ語は勉強をしてきたものの、もともと才能がないということでもあり、ウィーン大学での授業は、まさに聞いているだけ、いや座っているだけであった。

ドイツ語をさらに学びつつ、フレールさん、ポールさんにいろいろ教えてもらいつつ、まだ寒い3月、9区ガルニソン・ガッセ近く、食品店を開店準備していた夫妻と親しくなった。

フランクは、レバノン出身でウィーン経済大学で学位を得て、これから自立の準備。つれあいアニーは、アルザー・シュトラーセにあったウィーン大学社会学研究室で労働社会学を修め、そこで仕事をされていた。

大学の学業は全然だったが、「フランキー」開店準備、壁の塗装はじめ、私が少し器用なところもあり、いろいろ気に入っていただき、フランクの店にいることしばしばであった。ふたりから、それはそれは、たくさんのことを教えていただいた。



秋も深まった頃、フランクの店によくやってきたクルトという、オーストリア国立銀行の行員が、日本のことを聞きたいと、飲み連れに行ってもらった。

シュッテン・ガッセ裏の居酒屋で始まり、山本五十六、グーデリアン將軍の話をはろ酔いのおじさんから聞かされ、グラーベンのパブに連れて行かれ、踊り子たちがフィリピン人ばかりに驚いた。そして、映画「第三の男」にも出てくる「カサノバ」クラブに入るようになった。

私の隣に座って話してくれた女性は、ルーマニア、ブラショフから来たと教えてくれた。ジーヴェン・ビュルゲンは、ドイツ語の通じる場所と知っていたことなどがあり、にわかに意気投合。

クルトに、ここは高いから気をつけろと言われ、彼は帰り、私はもう少し残ったが、まもなく、もう一杯飲むか、帰るかという選択を迫られ、帰宅となった。外に出て、朝3時頃だった。これが、私のキャバレー、最初で最後となった。

ウィーンでの住まいは、ヴェスさんの友人ベルンハルトが紹介してくれたところで、8区アルベルト・ガッセにお住まいの毛皮職人のお宅、そこに間借りさせていただいた。女ご主人は、ドイツ人でウィーン訛りがなかった。

たまたま近くにあった、映画館「Albert Kino」、そしてカフェ「Hummel」は、よく訪れる場所となった。そして結果、いろいろな本屋にはよく通うことになった。



そんなある日、ショットテン・リンクにあった大きな書店で、シュルフター編著『行動・行為・システム』
(Wolfgang Schluchter, *Verhalten, Handeln und System - Talcott Parsons' Beitrag zur Entwicklung der Sozialwissenschaften*, Suhrkamp 1980.) という、パーソンズ追悼論文集を見出した。

ちょうど、前年、大学院に入って間もない5月、パーソンズはミュンヘンで客死されていた。追悼論文集を開いて、パーソンズ自身、学位を取得したハイデルベルクで名誉博士学位を授与され、その後のシンポジウムで、シュルフター、ハーバマス、ルーマンが登壇したことを知り、なるほどと思ったのであった。

そんなふうな過ごし方で、1年ウィーンにすることができ、そこを拠点に、西ドイツ国内、チェコスロヴァキア、プラハを経て東ドイツ、ドレスデン、ライプツィヒ、東ベルリンへと、今から思うと無謀にも感じるが、訪れてみたいと思っていたところへ、日々、ヴィザを更新しながら、知らぬ世界を冒険することができた。



留学には、まったくもってほど遠い遊学であったのは確かだ。そんな1年を許容してくれた父母には今さらながら心から感謝せねばならない。そしてフランク、アニー、クルト、リンハルト夫人、ベルンハルト、そしてポールとフレールには、感謝してもしきれ

ない。

7. ユルゲン・ハーバマスと社会調査

1981 年3月帰国し、最初にやったことは、アルバイトを探すことであった。たくさん面接を受け、最後に高輪と白金にあった「清風塾」の講師に採用された。藤春清塾長は、私のようにけっして受験勉強ができたわけでもない者を破格の待遇（月 68,000 から 90,000 円）で雇ってくださった。



ここからの収入と、理工学部に加藤諦三先生のティーチング・アシスタント（月 22,000 円）、「一橋ゼミナール」というやはり学習塾、西武池袋線、江古田、中村橋、清瀬にあった教室をかけもちで（月

40,000 円)、それと優しい父母からの援助で、やっていくことができた。当時の早稲田大学の学部、大学院の授業料は、年間 20 万円ほどであった。

博士課程に入学してからは、日本証券奨学財団の給付奨学金(3年間、月 60,000 円)をいただくことができるようになり、アルバイトを減らすことができ、それも嬉しかった。

1985 年定職を得て、この奨学金同窓生の会の幹事、地区幹事、さらには代表幹事に長く就き、いただいた学恩に、ささやかながらだが、お応えすることができたと思っている。

しかしながら、改めて思うのは、大学院へ進学するには、多大な費用が要るということであり、それが上首尾につながるかわからないということ。

そして、今も思うが、とりわけ、東京に出てきて下宿しているか、都心の親元自宅か、あるいは、社会階層調査ではわからないとされている資産のあるセレブ子女かどうかという決定的な格差問題が、研究者養成の環境には存在し続けているということ

だ。この格差は、私のこの時代とは比べものにならぬほど拡大してしまっている。

経済基盤を確立して、秋元先生の特論に復帰。

『ケルン社会学・社会心理学旬報』に寄稿されたライナー・レプシウスの「戦後社会学の展開」(“Die Entwicklung der Soziologie nach dem zweiten Weltkrieg 1945 bis 1967”, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Sonderheft 21.)と、ヘルムート・シェルスキーの反論「ドイツ連邦社会学の生成史に寄せて」(“Zur Entstehungsgeschichte der Bundesdeutschen Soziologie -Ein Brief an Reiner Lepsius”, *KZfSS*, 3.Heft, 32 Jg., 1980.)を精読していく戦後ドイツ社会学史であった。

これらは西ドイツ国内で議論となり、別冊に多くの論者が寄稿し、ヴェーバー以後のドイツ語圏の社会学史を通覧することができ、有り難かった。

ウィーン遊学中、丹下先生が、武蔵野社会研究所を設立され、その末席に座らせていただき、機関

紙『社会研究誌』に寄稿させてもらった。その創刊号に載せていただいたエッセイ「悲しき実証主義」は、今に至るまでの関心、日本で外国の社会理論の学派を紹介することが社会学かという問いである。

修士論文は、「システムとディスクール ―経済学の社会学的基礎づけ」という題目で、そもそもの主題、一般理論を構築していった経済学と、それをめざすも中途半端なままの社会学との関係を、パーソンズ、ハーバマスを文献の軸に据えて展開するものであった。

帰国したとき、すでに秋元先生は大学院のゼミをたたんでおられたので、新しくゼミを開かれた濱口晴彦先生のところに仮住まいのような形で置かせてもらった。

修士修了から博士課程に進むとき、私の関心ではということで、佐藤慶幸先生のゼミに入るようになった。

しかしながら、ヴェーバー、パーソンズという理論

社会学の課題への研究というよりは、先生の関心が、ボランティア・アソシエーションの経験的調査実施に向いており、博士課程3年間、そして助手2年間は、学生サークルの研究に始まり、東京から神奈川、埼玉にかけて展開している生活クラブ生活協同組合についての調査研究に従事することになった。



当時、SPSSも大型電子計算機で利用する時代だったが、プログラムにはじまり、たいへん多くのことを自学自習していくことができたのは、経験的調査を実際に繰り返し行う機会に恵まれたことがたいへん大きく、これは佐藤先生に大いに感謝している。

博士課程3年から助手2年間、生活クラブ生協の経験的研究に従事するのが主要なことであったが、

佐藤先生の演習では、刊行まもなくのハーバマス『コミュニケーション的行為の理論』(Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 1981.)を輪読していった。

このパーソンズの章のひとつは、上述したウィーン、ショットテン・リンクで出会ったシュルFTER編著に収められた、パーソンズのシンボリック・メディア論についての建設的提案であったが、ほぼそのまま収められていた。

いわゆる「生活世界の植民地化」と、それへの理論戦略として、「貨幣」「権力」というメディアに対して、パーソンズは素朴に「影響力」「価値委託」というメディアを考えていたが、ハーバマスは、これは言語コミュニケーションであり、討議であり合意プロセスであるという提案をしていた。

これに基づいて、そしてまたハーバマスの教授資格論文であった『公共性の構造転換』(Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, 1962.)でも、冒頭、構造—機能主義について批判的なコメントを加えているが、「公

共性」という概念を明瞭にして、討議と合意のプロセスが市民社会の前提であるというロジックはパーソンズにはないが、理論設定は、パーソンズの構造—機能主義と同じだと感じていた。

8. 学会と研究会

そういう問題を、1982年10月、神戸大学で開催された第55回日本社会学会大会で「システム理論と批判理論」として報告した。初めての学会報告であった。佐藤嘉一先生（金沢大学教授、後に立命館大学教授）が司会され、私の報告にたくさん手が挙がった。

富永先生が、ハーバマスにはマルクスがあるが、それとシステム論がどうして一緒にできるかと、また逆の立場から庄司興吉先生（東京大学教授）が、構造—機能主義、システム論と弁証法を同列で論じることができるのかと、質問、批判をいただくことになった。

また、結論としていた「討議と合意」の社会の例

として、ドイツ緑の人々の例に触れたことについても、多くからよくわからないというコメントをいただいた。

ただし、ハーバマスは、著作ではっきりと「新しい社会運動」ということを掲げており、それはそれまでの労働運動とは違う社会運動が出現していることに着目しており、私も、そういうドイツの姿を、日本の将来に期待したかった。

翌 1983 年、埼玉大学で開催された第 56 回日本社会学会大会でも「真理の合意説について」報告をした。司会者は、新睦人先生（奈良女子大学教授）であり、畏友西阪仰さん（早稲田大学大学院、後に明治学院大学教授、千葉大学教授）と同じ部会で報告をすることができた。

私としては、「討議と合意」のプロセスをさらに理論的に明瞭にしたかった。とりわけハーバマス、1973 年「真理諸説」(“Wahrheitstheorien”)を精読し、模写説にはじまり、真理の対応説、真理の整合説、そして真理の合意説についてたくさんのこと

を学んだ上での報告であった。

この報告には、塩原勉先生（大阪大学教授）からハーバマスの研究領域の広さについて、徳永恂先生（大阪大学教授）からは、ハーバマスの立論は基本的には物象化論のはずだが、それとシステム論を素朴に重ねることについて問われた。

新先生からは、この出逢いに始まり、とくに日本社会学史学会をつうじて、永年にわたり、いろいろなことで目をかけていただき、感謝しても感謝しきれない。

真理諸説に関連して、1982年11月、金沢大学で開催された日本社会学史学会大会で、「認識批判とオーストリア・マルクス主義」について報告したが、これはオットー・ノイラートの真理の整合説についてであった。

神戸大学、埼玉大学での報告は、「システム理論と批判理論 —J.ハーバマスと現代社会理論」『社会学年誌』（早稲田社会学会 24号 pp.1-18, 1983年3月）ならびに、「批判としての社会的行為

論 —ハーバマスのコミュニケーション行為論について』『社会学評論』（日本社会学会 35(3) pp.333-48, 1984 年 12 月）として活字となった。

金沢大学での報告も「認識批判と統一科学 — 1920 年代のオーストリア社会学」『社会学史研究』（日本社会学史学会 第6号 p.48-61, 1984 年3月）として、論文化することができていた。これについては、廣松渉先生（東京大学教授）、野家啓一先生（東北大学教授）ら、日本を代表する哲学者からもコメントをいただくことができ、嬉しかった。

大会ごとに出されている分厚い『日本社会学会 大会報告要旨』、その表紙の体裁は、今も当時とまったく同じままであるが、報告者が提出した要旨、今はきれいにワープロで印字されたものが収められている。当時は手書きであった。稀に和文タイプライターのものがあっただけであり、会場で配布するレジュメも、手書きであった。

すでに富士通のオアシスなどの事務用ワードプロセッサは存在していたが、とても個人で購入す

るのには高価であったとき、キャノンがキャノワードという個人向け機種を発売した。

欧文タイプライターの体裁に、わずか1行の液晶画面がついたものであったが、投稿し審査で朱が入り、添削、修正し、その度に、原稿用紙に最初から書き直し、さらに清書する作業を軽減するために、当時も、そして今考えても高価であるが、30万円近くするも、いろいろな知り合いを介して少し安く購入することができ、その導入は、ある意味で、革命なことであった。





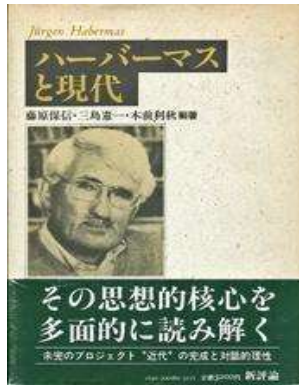
制度化された主要な学会とは違い、インフォーマルな関係では、鈴木幸寿先生（東京外国語大学教授）、茨木竹二先生（東京家政大学教授）が主催されていた「ドイツ社会学会研究会」、木前利秋さん（東京大学大学院、後に大阪大学教授）が主催されていた「批判理論研究会」が、当時の私には、きわめて重要であった。

ドイツ社会学会研究会との関わりでは、茨木先生のさまざまなコネクションをつうじて、シュルFTER、テンブルック、マッテスらドイツの著名な社会学者たちと関わる機会を得ることができた。とりわけ、ヨアヒム・マッテス教授ご夫妻とは、京都、奈良への旅行をご一緒することができ、たくさんの情報を教えて

いただき、それはそれは有り難かった。

批判理論研究会は、さまざまな読書会を一緒にした西阪仰さんに、紹介していただき、毎週日曜日、さらには水曜日も、行われていた早稲田奉仕園の会議室に通った。中尾健二さん（静岡大学教授）、中野敏男さん（東京大学大学院、後に東京外国語大学教授）、岩崎稔（早稲田大学大学院、後に東京外国語大学教授）、初見基（東京都立大学大学院、後に日本大学教授）ら、錚々たる方々から、たくさんの刺激をいただいた。

ハーバマスを軸に、ヴェーバー、アドルノ、ホルクハイマーらを徹底的に学ぶ機会を与えていただいた。その成果は、藤原保信・三島憲一・木前利秋編『ハーバマスと現代』（新評論 1986 年）であり、たいへん充実した5年間であった。



また、土方透さん（中央大学大学院、後に聖学院大学教授）との関係で、1986年9月には、早稲田大学の会議室で、若い私たちと、ニクラス・ルーマンとの研究会を催した。午後から深夜まで、途中、居酒屋に移動しての研究会で、ルーマンは最後まで付き合ってくださった。

馬場靖雄さん（京都大学大学院、後に大東文化大学教授）、西原博史さん（早稲田大学大学院、後に早稲田大学教授）、徳安彰さん（東京大学大学院、後に法政大学教授）、田中耕一さん（早稲田大学大学院、後に関西学院大学教授）ら、それはそれは優秀な同年輩と刺激し合える時を大いに体験した。



当時は、西武池袋線桜台と練馬の間にある狭いアパート、本箱だらけの中に住んでいたが、たいへん充実した幸せな時であった。ハーバマスの論文「真理諸説」も、同じく西武池袋線清瀬駅前のベンチで、アルバイトが始まるまでの時間を惜しんで読んでいた思い出がある。



助手2年目となる時、同じく大泉学園から徒歩30分、三原台にある賃貸マンションに移った。初め

て洗濯機を買い、エアコンを丸井のクレジットで手に入れた。

9. 「緑の人々」と

池子米軍家族住宅建設反対運動

1987 年、文学部社会学専修の専任講師にいただき、教壇に立つことになった。

講義「社会学研究」（第一文学部）では、ハーバマスに基づいた意識論の言語論への転換を講じ、講義「社会学」（第二文学部）では、前期はコント以来の学史、後期は社会階層調査の構造などを講じた。演習「社会研究」（第二文学部）では、上野千鶴子『主婦論争を読む』（勁草書房）などをテキストに議論をした。「教養演習」（第一文学部）では、村上泰亮『新中間大衆の時代』（中央公論社）を中心に西部邁の著作などをテキストに議論をした。

充実した教員人生が始まったが、何よりも「社会学演習Ⅱ」（第一文学部）、これは社会調査実習で

あり、テーマに、ちょうど日本中で話題となっていた神奈川県逗子市の池子米軍家族住宅建設反対運動を選んだ。まさに「新しい社会運動」の事例として考えたからである。



選挙人名簿から抽出した女性市民 1298 人へのアンケート調査（回収 618 票）とともに、運動に参加する「普通の主婦」とされた人たちへの 64 人に長時間インタビュー調査も実施した。

この調査実習は、参加してくれた 22 人のたいへん優れた学生により可能となったものであり、また逗子市と私との人生にわたる関係を作り上げる事になった。有り難いことに、卒業後も、しばしば集まり楽しい時間を過ごしてくれる貴重な友となってく

れた。



調査実習は、調査に直接、学生が関わり、まさに社会と接触するということに大学での貴重な経験であると同時に、優秀な学生により、得られるデータは最高水準のものであり、経験的研究を授業とともに進めていくことができる理想的環境であった。

逗子の池子米軍家族住宅建設反対運動は、その後2度、1989年度にはさらに大規模なアンケート調査（男女 1600 人対象、回収 882 票）、1990年度には全体の詳細整理を行ない、合計3回の調査と分析を行なった。



成果は、1988 年早稲田大学で開催された第 61 回日本社会学会大会の環境部会で、飯島伸子先生（東京都立大学教授、環境社会学会会長）の司会のもと最初の報告をさせていただいた。その後、蓮見音彦先生（東京大学教授）、似田貝香門先生（東京大学教授）に誘われ、1991 年5月に東京大学で開催された地域社会学会大会で報告をした。

「池子米軍家族住宅建設反対運動の組織と環境に見る今日の《転換期》について —〈緑〉の意味論 (Semantik) 序説」(第 16 回地域社会学会大会シンポジウム報告)として詳細な報告をすることができ、「池子米軍家族住宅建設反対運動に見る今日の〈転換点〉—1987 年市長選後の面接調査結果から」『年報地域社会学』(地域社会学会、第 6号 p.133-6, 1994 年5月)として活字化した。

さらにその後、私自身の単独の追インタビュー調査と、調査をさせていただいた対象者全員への郵送調査を実施した。

長年の調査のまとめとして、「運動体の分解と運動の意味 —1994年12月逗子市長選挙の調査結果から」を、1996年7月に奈良女子大学で開催された第21回地域社会学会大会で報告し、一連の成果のまとめとしたが、報告について、北川隆吉先生（名古屋大学名誉教授、法政大学教授）から、運動と、それへの私の観察者の立場、すなわち社会運動への認識の客観性ということに強い批判を向けられ、会場で大変な激論となった。

ただし、激論は、新たな出会いを作ることになった。北川先生が企画された東信堂による『シリーズ世界の社会学・日本の社会学』の1冊『アルフレッド・シュッツ —社会的世界と主観的時間』を、私にお願いするという、激論とは正反対の格別の依頼を受け、意見は言うべきものだと思つて改めた。

そしてこれが、出版社東信堂に、長くご贔屓にし

ていただく関係の始まりとなった。

他方、逗子で実施してきた一連の調査研究の成果は、1996 年御茶の水書房から『逗子の市民運動』として研究書にすることができた。

10. 『アルフレート・シュッツのウィーン』

さて、1987 年専任講師にさせていただき、5年を経た 1992 年、在外研究の機会を与えていただき、1980 年に行うことのできなかったことを、改めてウィーンで徹底的に行う機会をいただいた。

1990 年、『社会科学討究』（早稲田大学社会科学研究所 第 37 号(3)）に「アルフレート・シュッツとウィーン —社会的世界の構成現象学成立事情研究序説」という論稿を掲載していただいた。

その主旨は、シュッツは、主観主義の社会学として、下田先生はじめ、多くの「現象学的社会学」を掲げる同年代、年長世代たちによるシュッツをめぐる解釈に、大いなる疑問があったからである。

シュッツが学んできたプロセスを追っていくと、また主著『社会的世界の意味構成』を精読していくと、主観主義社会学の構築などよりも、一方で、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスの限界効用学派、ハンス・ケルゼンの純粹法学、あるいは批判対象としてのオトマール・シュパンの復古主義が重要なテーマとして展開されている。

これはまさに経済学、法学など他の社会諸科学と、社会学の関係、とりわけその使命が取り上げられているということであり、現象学も、その問題系は、素朴に主観主義を主張しているのではなく、主観、客観の存立前提を問うということである。

他方で、音楽、演劇などへの関心は、ただ主観的感覚の開陳などではなく、きわめて理論的な内容であるということを理解したからである。

素朴に、主観主義として、パーソンズを客観主義、さらにはパーソンズは保守主義、シュッツは革新的という、つまらない対置を超える研究が必要だと思ったところが大きい。

1992 年から3年にかけて、ウィーン大学哲学科のアルフレート・プファービガン先生に多々教えられ、ウィーン大学図書館、オーストリア国立公文書館、ウィーン市役所資料室、オーストリア商事裁判所資料室に通った。

さらにドイツ、コンスタンツ大学に開室されたばかりの「アルフレート・シュッツ文庫」にイリヤ・スルバール先生を尋ねて、手書きの遺構、草稿、手紙などを多々読ませていただき、たくさんのノートを取ることができた。これは、そう簡単にできるものではないだろうと思っている。

重要な遺構と草稿は、『アルフレート・シュッツ全集』(*Alfred Schütz Werkausgabe*, Herbert von Halem Verlag)として 2023 年全巻が公刊されているが、その長大な作業が始まる前にそれに関わる人たちと会うことができ、知的好奇心に満ちた楽しい経験であった。

かつて 12 年前に遊学させていただいた8区にある、ランゲガッセに住まいを借りた。つれあいは、

ウィーン大学で聴講しつつドイツ語を磨き、私は図書館、文書室の日々であった。

家主であるライニンガー夫妻は、写真家であり、美術館の絵画分析など、またしばしば料理講習をしていただき、たくさんのことを教えていただいた。それがきっかけで、8区のフォルクスホッホ・シュレーのウィーン料理教室にも、つれあいと通った。実にさまざまな経験をすることができた。

私自身の研究成果は、拙著『アルフレート・シュッツのウィーン —社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』としてまとめた。

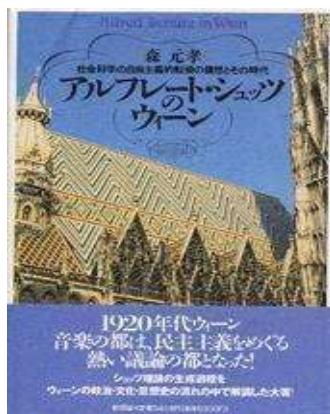
シュッツの、そもそもの理論構築のレリバンスを、1920年代ウィーンの社会科学、政治社会、経済状況、芸術と重ね合わせて、公開されている文献のみならず、未公開の草稿、書簡にまで遡求した研究成果であり、これを超えるものは、未だ知らない。

量的にも、78万字以上あり、1994年9月、早稲田大学文学研究科に博士号請求論文として提出することができ、翌1995年12月、当時の奥島孝康

総長から学位記を授けられた。

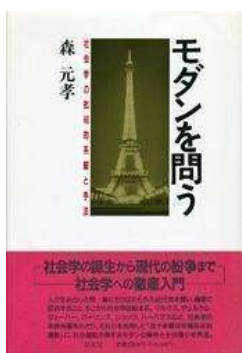


同年9月には、新評論から 748 頁になる書として出版していただくことができた。社会学のみならず、経済学者、哲学者、倫理学者からも、少なからず書評、引用をいただくこととなり、有り難く幸せなことであった。



『アルフレート・シュッツのウィーン』を出版した
1995 年9月、ほぼ同時期、弘文堂から社会学につ
いての教科書『モダンを問う ―社会学の批判的系
譜と手法』を出版させていただいた。

これは、とりわけ講義「社会学」、講義「社会学研
究」、そして社会調査実習での成果を織り交ぜた内
容豊かなものであった。翌 1996 年には『逗子の市
民運動』も御茶の水書房から出版することができ、
私の教員生活、その一区切りということであったの
かもしれない。



実際、そうであり、1994 年夏から翌年秋まで早
稲田大学教員組合書記次長、1996 年9月から 98
年9月まで第一文学部学生担当教務主任に就き、

これまでにない仕事をするようになった。

11. ドイツ日本社会科学会

そうした仕事にひと区切りがついた、1998 年9 月、第5回ドイツ・日本社会科学会 (German-Japanese Society for Social Sciences) 大会を早稲田大学国際会議場で私が世話人として開催することができた。

この学会は、1994 年第3回大会が関西大学で開催され、この学会の副会長をされていた富永健一先生に誘われて入会し報告することになった。

「Basisdemokratie und Lokale Politik (草の根民主主義と地方政治)」という池子米軍家族住宅建設反対運動の研究成果を報告し、これは好評を得た。その結果もあり、教育心理学の並木博先生 (早稲田大学教授) とともに、続く 1996 年のコンスタンツ大学での開催の次、1998 年、第5回大会を早稲田大学で開催することになった。

その後、2004 年ヒルデスハイム大学、2006 年金沢大学、2008 年オスナブリュック大学、2010 年法政大学、2013 年バート・ホンブルク、ヴェルナー・ライナー財団、2015 年ドイツ日本研究所東京、2018 年オスナブリュック大学、2019 年ハンブルク大学、2022 年上智大学、2024 年ドイツ日本研究所東京での第 17 回大会まで、長い間にわたってお世話になった。たいへん光栄で有り難いことである。

会長のハンス・ヨアヒム・コルナット先生（ザールブリュッケン大学教授、ドイツ心理学会会長）、副会長のギーゼラ・トロムスドルフ先生（コンスタンツ大学教授）にはたくさんのことを教えていただいたが、私のそもそもの出発、目標とした富永健一先生とも、またドイツ社会学研究会、ルーマン研究でも多くのことを教えられた徳安彰先生とも長い関係が続いていった。

富永先生が 2008 年に出版された『思想としての社会学 ―産業主義から社会システム理論まで』

(新曜社)という社会理論、社会思想の大著をめぐって、2009 年立教大学で開催された第 82 回日本社会学会大会シンポジウムで討議が催され、批判者として登壇させていただいた。

そうした場を与えていただいたことは嬉しかったし、駆け出し以来、目標にしてきた偉大な先生に物申すことができたことは、たいへん光栄なことであった。

2010 年『思想』（岩波書店 4月号）「思想の言葉」で、富永先生はそのときのことを記され、私の意見に、たいへんご不快であったとあるが、その後も、ドイツ日本社会科学会をつうじてお話をすることが続いていった。



必ずしも、この学会のためというわけではなかったが、1994 年の報告以来、日本の民主政治について、この学会で報告をすることが通例のようになっていった。

12. 東京都知事選挙と民主政

池子米軍家族住宅建設反対運動が、まさに国の力で押し切られ、運動体が分裂していく結末を知り、社会調査の研究テーマは、仕事場の東京をフィールドとするようになっていった。

その始まりは、まだ逗子の調査も続行中であったが、1991 年東京都練馬区の区長、区議会議員選出の構造を描くことであり、選挙人名簿から対象者を抽出するアンケート調査と、自由回答で応じてくださった対象者へのインタビュー調査であった。これもたいへん充実した調査実習であった。

このとき、1991 年東京都知事選挙で、自由民主党が本部と東京都連とで分裂するという事態に興味を持ったことがきっかけであった。そして東京都連

が押した鈴木俊一知事がバブル景気とともに財政回復を実現し、世界都市博覧会を構想していた時代であった。

しかし、間もなくバブル崩壊とともに、失われた時代が始まり、1995年には、青島幸男が当選する。さらに、1999年には、石原慎太郎が当選し、東京都知事とは、あるいは東京都民の意識とはということに、大いに興味を覚え、1999年には、6000人規模の郵送調査を実施した。

郵送調査を実施したのは、苦肉の選択でもあった。やはり社会調査実習での調査であったので、調査員となった学生が回収に行くのがよりよいことであつたが、その前年、港区で実施した調査では、オートロックマンション、表札を掲げない家など、世の中が変わりつつあり、また学生自身が、社会調査に対して、とりわけ回収するために訪問するということに、かつての熱意が薄らいでしまったと感じたこともあった。

郵送調査で回収率は2割強でしかなかったが、

調査規模を大きくしたことにより、自由回答も多くの意見が得られ有益な調査実習であった。

21 世紀に入ると、選挙人名簿の閲覧が厳しく制約されるようになり、そこからのサンプリングが難しくなり、住宅地図からのサンプリングなどを実施していったが、長く続けてきた社会調査実習の実施が困難な時代となっていった。

そうした変化を踏まえて、社会学のカリキュラムを大いに議論すべき時であったが、残念ながら、そうした機会を得ることはなかった。

13. 長期信用銀行制度と貨幣発行自由化論

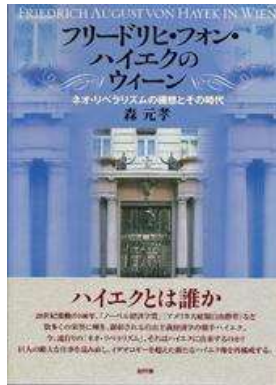
バブル崩壊、それは日本の経済システム、戦後、いや明治以来の村上泰亮いう「追いつき型」近代化、すなわち経済システムと社会との関係を根本的に変えることができるかという問いであった。

そもそもの関心「経済理論の社会学による基礎づけ」、言い換えれば経済に社会はどう関係してい

るかという問題を、この問題に援用することが、新たなテーマとなった。

『アルフレート・シュッツのウィーン』で、ミーゼスについては大いに論じたが、ミーゼスのプライベート・ゼミナールに、シュッツとともに参加していた人たちのひとり、のちに 20 世紀、最重要の経済学者ハイエクについての研究は不十分であった。

それへの追加研究が、『フリードリッヒ・フォン・ハイエクのウィーン —ネオ・リベラリズムの構想と展開』（新評論 2006 年）であるが、ハイエクが戦間期のヨーロッパ経済を細かく捉えていたのに倣い、日本の「追いつき型近代化」を可能にした経済制度の特質である長期信用銀行制度、その興亡に着目した。実際、バブル崩壊後、長期信用銀行制度も崩壊する。

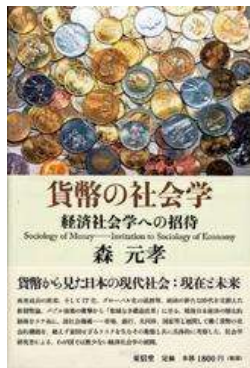


直接金融である証券投資を後ろに退け、限られた階層にのみ許容し、銀行による間接金融を軸にするも、銀行に制度的階層を設けて、日本興業銀行、日本勧業銀行など、金融化していった寄生地主のファイナンスと、庶民の郵便貯金という特異な配置関係を設定して、貨幣と貨幣派生体との循環システムを構築して財政運営をしていく日本の財政構造について社会理論的アプローチで辿っていった。

これと並行して、ハイエクがその晩年、一般には無視をされたに等しい貨幣発行自由化論に着目した。

それが、『貨幣の社会学 ―経済社会学への招待』（東信堂 2007 年）であり、もともとは第一文

学部社会学専修での「社会学研究」で取り上げていた問題であり、文化構想学部発足後は「社会理論」として講じることになった。この問題には興味関心を持ってくれる優れた学生が少なくなく、その方面で大学教員、ジャーナリストとして活躍している頼もしい方々もおられる。



貨幣発行自由化論は、ハイエクが提唱した 1970 年代には、来るべき欧州統一通貨に対して、すなわちそれがグローバルのように感じられるかもしれぬが、統一欧州という大きな国家が発行する通貨にほかならない。それよりも、貨幣そのものの脱ネーション化が必須であるという主張であった。

しかし、この革命的な発想が理解されるようにな

るのは、2009 年になって、仮想通貨、すなわちサトシ・ナカモトによるビットコインの構想と実践であった。私は、これの可能性、そしてそれを理論的に予言したハイクについて、大いに感心をした。実際、きわめて多数の仮想通貨が出現し、まさに貨幣そのものの自由化、貨幣そのものが商品化するという意味での貨幣商品説の実現であった。

『未来社会学 序説 ―勤労と統治を超える』（東信堂 2018）は、そういう未来社会において、かつ超高齢化が進行していく日本において、何が必要かということを問おうとしたものであった。しかしながら、これを 2018 年度、社会構築演習で教科書としたが、なかなか学生が十分に理解しているようには思えなかった。

『貨幣の社会学』についての興味関心と、どうして違うのかわからなかった。学生たちのパースペクティブは、「ジャパンアズナンバーワン」への郷愁、年寄り同様に、やはり過去に向いているのか、あるいは、私自身が年齢を重ね、若い人たちと関心

がずれてしまったのかという疑念を抱いてしまうほどであった。



今ひとつ、Facebook (現 meta) が、LIBRA という新しい仮想通貨を構想し、日本の銀行においても、類似の構想がされたのだが、興味深いことに、各国政府、中央銀行は、多数生まれた仮想通貨にも、構造が本質的に異なるが LIBRA についても、きわめて制約的行動を加えるようになり、仮想通貨は、「暗号資産」として、貨幣ではないという位置づけがなされるようになっていった。

これは、ハイエクが構想した貨幣の脱ネーション化は、再びネーション化の徹底に虐げられる結果になったということである。

14. ジョイント・セミナー

2002 年3月から翌年3月まで在外研究でウィーンに滞在した。すでに触れたハイエクの集中研究のためである。ウィーン大学図書館、ザルツブルク大学図書館、フライブルクのヴァルター・オイケン研究所、さらにはアメリカ、スタンフォード大学フーバー研究所ハイエク・ペーパーズから未公表の文書の複写を取り寄せつつ、研究を進めた。

このときも、2002 年夏から1年お世話になったライニンガー夫妻にお願いして住まいを貸していただいた。この時は息子も一緒に、ウィーン日本人学校で1年過ごした。

そんな時、ウィーン大学の政治学の学生からメールをいただいた。ウィーン大学政治学研究室は、毎年海外の大学と学生ジョイント・セミナーをやっている。ヨーロッパはほぼ周り、去年は中国。今年は日本を選び、パートナーとなってくれる大学の先生を探しているという話であった。

偶然にも私がウィーンにいるのに驚いた彼は企画者に紹介するというので、ただちにお相手に会いに行った。オーストリア社会・女性・世代省のビルギット・クラウサーさんだった。政治学研究室で講師をされていて、ペーター・ゲーリツヒ教授が主宰するゼミと、ジョイントできないかという話であった。たいへん積極的な人で、それ以来、人生の友となった。

2004年6月ウィーン大学から学生たちがやってきた。10日間ジョイント活動をした。私は、大学院生、学部生混成のチームを編成し対応したが、皆、能力高く、有意義な交流ができた。

鎌倉に遠足し、月曜から金曜まで昼間は報告と議論、国会議事堂参議院内見学、靖国神社、東京タワーを訪れ、夕方から東京観光の毎日、週末、京都を周り関西空港から帰国していった。

ゲーリツヒ教授から、来年は日本から来てくださいと誘われて、2004年9月、私たちがウィーンを訪問した。到着翌日、シュネーベルクに登り、月曜から金曜まで報告と議論、そしてカール・マルクス・ホ

フ、国会議事堂、緑の党本部などを訪問、党首とも議論をし、さらにツヴェンテンドルフ原発跡への遠足など、楽しく有意義な 10 日間を過ごすことができた。

2年にわたるゼミ交流で、学生たちの間にも深い絆ができた。



これに続いて、エルフルト大学のラインハルト・ツェルナー先生（現・ボン大学教授）が企画された「**International Study Program**」という同様のジョイント・セミナーに、高橋透先生（ドイツ文学専修、後に表現・芸術系、現代人間論系）と参加した。

エルフルト、ワイマール、韓国の漢陽、京畿、横浜国立と早稲田から、それぞれ学生が参加した。「記憶」「シティ・スケイプ」「国境」などをテーマに、社会科学、文学、歴史、建築の教員、学生が参加した。とくに建築という、日本では「理系」とされる領域との複合であり、学生交流、教員交流、そして学問の交流に大いに意味があった。

2006 年 5 月ワイマール大学、9 月早稲田大学、10 月ソウル、漢陽大学、2007 年 3 月横浜国立大学、8 月ベルリン日独センター、エルフルト大学、10 月ソウル、京畿大学、2008 年 3 月漢陽大学と早稲田大学で、各回 10 日のハードスケジュールでジョイント・セミナーを実施した。

テーマをめぐる事前文献講読と報告、討議、ザクセンハウゼン強制収容所跡、板門店、ポーランド国境の町ゲルリッツなど、それぞれの地でさまざまな史跡、建築などを見学し、たいへん意味のあるもので、ここでの出会い交流も、私自身のみならず、参加学生たちに有意義な絆を今に至るまで作り上げ

た。



当時、第一、第二文学部体制終了、文化構想学部、文学部新設の設計途中で、教務担当教務主任に就いていて、文化構想学部に創設されるゼミ制度に、経験したジョイントを組み合わせることができないか、私が担当することになるゼミでできないか、大学院の演習をこれにジョイントし制度化できないかなど模索した。



問題は、費用、そして興味ある学生、大学院生は確実にいるが限られていること、そして学部3年生

後期には、就職活動に心奪われること、大学院生はとくに経済的に逼迫しているなど難しい問題があった。

1990年代前半から始まった旧帝国大学の大学院化により、また海外の大学院への道も広がり、私立大学の学費のコスト・パフォーマンスの悪さから大学院への志願者が限られていくことになった。

ドイツ語、フランス語が忌避され、統計学、プログラミングも敬遠され、社会理論を欠いた史料研究を中心にしていくなら、すでに日本史学の明治以降、昭和日本をめぐる研究が高い成果を出しているのだから、社会学者が顰みに倣っていく傾向に大いに疑問があった。社会学の理論や方法が消えていったという問いである。

変質して蛸壺に入っていく社会学とは訣別し、大学院担当を降り、ツエルナー先生がさらに企画し、DAAD（ドイツ学術振興会）で採択されたプログラムでのジョイントに参加したいと考えたが、この企画は、残念ながら教授会で認められなかった。

残念であったが、2010 年秋、ちょうど「文学部 120 周年記念行事」が催され、その企画のひとつ、アジア史の李成市先生（早稲田大学教授）がコーディネーターとなられた「〈東アジア〉とは何か — 共生のための地域形成への模索」において、ツェルナー先生、張寅性先生（ソウル大学教授）、劉傑先生（早稲田大学教授）と並んで、専門違いの私も登壇させていただいた。

ツェルナー先生の講演を踏まえ、お話をさせていただいた〔『文学学術院創設 120 周年記念行事の記録 **FUTURE UNDER CONSTRUCTION** — 交差する知— 文化の構想力』（文学学術院 2011 年3月）所収〕。

新たに始まる文化構想学部社会構築論系共生社会論ゼミ担当ということで、私が呼ばれたということもあるのだろう。ただ「共生」という言葉は、国立大学、文科省風のそれのようであり、始まるゼミの基本テーマは、“Can We Live Together?” と提示していた。

人々が、それほど巧く「共に生きていくこと」ができるのかという問いがつけねにある。企画テーマである「東アジア」ではとりわけ難しいとも言える問いであった。

しかしながら、ツエルナー先生というドイツ人が参加することで、さらにドイツの学生たちが参加することで、東アジアにおける、中国と日本、韓国と日本という二国関係にして「過去」を問うというのとは違う次元が拓けてくる。

すなわち同様に世界大戦を引き起こしたドイツとその戦後の問題を考えることで、戦争と戦後についてドイツと日本の違いも重ねながら、また対立的な議論ではなく、複眼的な討議が可能になるという、ジョイント・セミナーの理念をまとめることができたように思う。

とりわけドイツ連邦大統領であり、2005年に早稲田大学が名誉博士として顕彰したリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーによる、1985年の有名な演説「荒れ野の40年」を、あるいは早稲田大学正門

「教旨」にある「学の独立」「学の活用」「模範国民の造就」について、第 14 代総長奥島孝康先生は、その総長就任挨拶で「模範国民」は「世界市民」と読むとされたことなどを引きながら、東アジアへのわれわれの関わりをコメントした。

ジョイント・セミナーを制度化することはできなかったが、ちょうどこのシンポジウムるとき、翌 2012 年度のゼミ志望者を募っていたら、「私は韓国と日本の架け橋になりたい」と志願書に書いてきた韓国からの留学生がおられた。

ゼミ論文では、とりわけ小泉純一郎政権の意味について書かれ、持ち前の器用さもあって、大学院日本語教育研究科に進まれ修士、博士学位を取得し、現在は都内の私立大学で教壇に立たれている。

メディア・アーキテクトのクリス・デーネさん（ワイマール大学建築学助手、後にフランクフルト大学講師）は、日本に大いに興味を持たれ、Chris Dähne, *Die Stadtsinfonien der 1920er Jahre. Architektur zwischen Film, Fotografie und Literatur*, Transcript 2013.と

して出版される学位論文制作のために、2012 年に早稲田大学に訪問学者として滞在された。

国立近代美術館フィルムセンターで見つけられた「復興帝都のシンフォニー」、これを複写してドイツでも公開できないかと奔走され、フィルムセンターとフランクフルトのフィルム・アーカイブとの交換協定締結まで努力され、ご本人の研究のみならず、大きな文化交流の道を開かれたのも、そもそもはジョイント・セミナーへの参加ということにあった。

今ひとり、漢陽大学助手で、このジョイント・セミナーに参加されたテジョン・リー (Taejeong Lee) さんも、2013 年秋学期、国際交流基金により、早稲田大学に訪問学者として滞在、フィールド調査を実施された。

その間、これまで私の調査実習、卒業論文で得た貴重な人たち、大手新聞社論説委員、国立大学、あるいは私立大学で教壇に立たれている先生たちに講演と質疑、討論の場を作っていただき、懇親会を含め、現役ゼミ学生たちとの交流会などを数回行う

ことができた。

かつての調査実習をつうじてつながるのとは、また異なったつながり方であり、意味あるものだったと考えている。

15. アルフレート・シュッツのつながり

1995 年『アルフレート・シュッツのウィーン』を出版した後、そのために 1993 年集中的に調査をさせていただいたコンスタンツ大学社会科学アーカイブ、アルフレート・シュッツ文庫から、1999 年 5 月、シュッツ生誕百年記念シンポジウム開催と、そこでの報告を求められた。

佐藤嘉一先生（立命館大学教授）、那須壽先生（早稲田大学教授）、西原和久先生（名古屋大学教授）らに続いて、「シュッツ、社会的世界論着想の理論史的再構成」を、スプロンデル先生の司会のもと報告した。

これをきっかけに、また那須教授が重要な役割を

演じられ、スルバール教授（エアランゲン大学）、ジョージ・サーサス教授（ボストン大学）、レスター・エンブリー教授（フロリダ・アトランティック大学）、マイケル・バーバー教授（セントルイス大学）らと連携して、ドイツ、アメリカ、日本のみならず世界にわたるシュッツ研究者たちを結ぶことに寄与された。



私も、早稲田（1999、2004 年）、ウィーン（2007、2025 年）、コンスタンツ（2009、2018 年）、セントルイス（2021 年）で報告する機会を得て、また英語、ドイツ語の研究書、イタリア、フィレンツェ大学の専門雑誌（"Future Structure of the Life-World -As an inevitable consequence of the «peer-to-peer» ", in:

Società Mutamento Politica 6(12) pp.81-9. 2016) などにも寄稿する機会を賜った。



早稲田大学で開催された 1999 年には、イリヤ・スルバール先生ご夫妻を、つれあいとともに、京都、奈良へお誘いし、2004 年には、シュッツツご息女イルザさんらを、京都、大阪観光にご案内する機会も得た。

学問研究を通じて出来上がったつながりが、豊かな人間関係に広がり素晴らしいことであった。



2009 年のシュッツの音楽論をめぐるコンスタンツ
での会議では、トマス・ルックマン先生と、差し向か
いで議論することもでき、それは、「媒体をつなぐ媒
体〈音楽〉」という報告であったが、論文
（“Musical Foundation of Interaction :
Music as Intermediary Medium”,
Michael Barber, Jochen Dreher (eds.),
*The Interrelation of Phenomenology,
Social Sciences and the Arts*, Springer
New York 2013, pp.267-77) にすることが
できた。



少なからず業績が産まれたが、2007年9月ウィーンでの報告「平和の脱ネーション化 —社会的世界の意味構成と尾高朝雄教授」("The Denationalization of Peace - *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt* and Professor Tomoo Otaka", in: Alfred Schütz und die Hermeneutik, Wien, 18. bis 21. September, 2007. Organisation: Institut für die Wissenschaften vom Menschen, Wien, u.a. in Kooperation mit dem Sozialwissenschaftlichen Archiv Konstanz)は、後述するが『ヴェーバー後、百年』に加筆邦訳して収めた。

また、スルバール先生の退官記念論文集に寄

稿することができた「媒体としての人」
("Person als Medium –Eine
pragmatisch-phänomenologische
Alternative zur Systemtheorie", Joachim
Renn, Gerd Sebald, Jan Weyand (Hersg.)
*Lebenswelt und Lebensform: Zum
Verhältnis von Phänomenologie und
Pragmatismus*, Velbrück, pp.192-205
2012) は、私の基本軸であり、次節で述べる
『理論社会学 ―社会構築のための媒体と論
理』の基本でもある。

アルフレート・シュッツをつうじて、実にたくさんの人たち、たくさんの世界と、研究を超えてつながることができたことは何にも代え難い幸せなことであった。

16. 媒体「身体」「言語」「人」

経済システムへの研究展開とともに、社会システムそのものについて、パーソンズ、シュッツ、ルーマ

ン、ハーバマスの思想と理論を咀嚼して、私の社会学を提案することになった。それが、『理論社会学—社会構築のための媒体と論理』（東信堂 2014年）である。

その要点は、しばしば言われる「社会は、個人の集まりである」「社会の構成単位は個人である」という、いわゆる方法論的個人主義は、またそれに対する方法論的全体主義とともに、誤りだということにある。

社会は、言ってみれば、つなぐ媒体から成っている。何をつなぐかというと、それは出来事であり、その出来事は、人間と関連することで、体験と行為であり、そのマトリクスを考えれば、体験と体験、体験と行為、行為と体験、行為と行為という連関を可能にしていく媒体があり、その種類を明瞭にしていくことで、社会システム、言い換えれば、社会はどのようにありうるかを言うことができるというロジックで明瞭になる。

パーソンズ、シュッツ、ハーバマス、ルーマン、どの

人にも「メディア」は概念として登場してくるが、これを徹底的に体系化して整理しつつ、発生している世界社会、日本社会の諸問題を題材に論じたものである。

本書は、2015 年度から文化構想学部社会構築論系の私のゼミナール、3年生春学期の必読教科書として使用していった。個人が、社会を変えることはあるが、その個人は、どのようにありうるかは、さらに溯って論じることが不可欠だということである。

この『理論社会学』は、たいへん面白く光栄なことに、2015 年度のさる私立大学の入学試験「国語」の長文問題にも使われることがあった。



17. 『石原慎太郎の社会現象学』

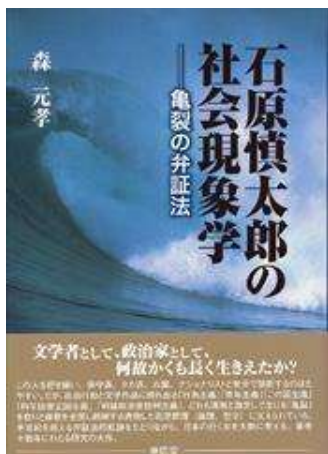
1990年代から東京都をフィールドにして社会調査を、当初は郵送留置調査、そののち郵送調査とせざるをえなかったことは先述したが、それはさらにネット調査となっていくことになった。そして1999年以来、東京都知事は、石原慎太郎が4期にわたって務めることになり、とりわけ都知事選挙後に、その投票意識調査を、パネル調査として繰り返していった。

なぜに世界都市博覧会中止を公約にした青島幸男知事が当選するも1期4年で終わり、イデオロギー的には反対の石原が当選し、最終的には4期にわたって選ばれたかという問いである。しかしながら、この問いは、社会調査ではわからないことがわかった。石原慎太郎自身を、どうして、そのイデオロギーとはまた別の水準で好意的に受け入れるのかという問いが浮かんた。

結果、調査方針を大きく変更し、作家石原慎太郎を徹底的に調査していくことになった。参議院議員に始まり、衆議院議員、東京都知事には実は5度立

候補し4度当選という、他に同時代人を見つけるのが難しい、この戦後日本を表象している人を徹底的に調査することにし、この作家、政治家の膨大にある著作を収集し読み通していった。

その成果が、『石原慎太郎の社会現象学 ―亀裂の弁証法』（東信堂 2015 年）である。この本は、大いに話題ともなり、私はテレビの取材を受けたり、さらには「金スマ」にも出演することにもなった。面白い経験であった。『石原慎太郎 ―創られたイメージを超えて 戦士か文士か』（東信堂 2016 年）で、そのエッセンスをまとめることもできた。



さらに有り難いことに、石原慎太郎氏自身とも、何度となく、お話しをすることができ、非常に多くのことを教えられた。

いろいろな手法で小説を書かれる石原氏であるが、とくに一人称小説が得意だと感じたので、初めてお会いした時、「田中角栄についての評価が、時が経つにつれて大きく変わっているように感じますが、田中角栄について一人称で小説を書かれたら、きっと面白いです」と言ったら、子どものように顔が輝き、「グッドサジェスション」だと返された。

そしてそれから8ヶ月ほどで、『天才』（幻冬社 2016 年）を発表され、これは文庫本とともにミリオンセラーになった。たいへん貴重な体験をさせていただいた。

18.フル・オンデマンド講義

1996 年、西本武彦第一文学部長（のちに教務担当常任理事、副総長）のもと学生担当教務主任に就いたとき、最強の副主任兼築信行先生（日本

文学)とともに断行した、主要な仕事は早稲田祭正常化、ミルクホールならびに0番教室の正常化という、早稲田大学が大学紛争時代から引きずったままの不規則な諸問題であった。



ただ、その一方で、西本学部長、ならびに高木直二第一文学部事務長(のちに理事)は、「文学部情報化計画」と称して、それまで自分たちの学部ホームページさえなかった第一、第二文学部の情報化を薦進させた。

ウェブページには代表的教員の研究成果開陳、企業と組んで英語教育の新展開、衛星をつうじての遠隔教育などを試み、そのひとつに、現在では、とりわけコロナ禍以降、一般的になった遠隔教育を、20年以上前に先駆けて実践した。

そんな中で、いわゆるオムニバス講義を、インターネットをつうじたフルオンデマンド授業で行うというプロジェクトに加えてもらい、3回分の講義を作った。

これが始まりであり、それから10年を経て、2009年、文化構想学部のさらなる展開に合わせて、新たに考案した講義「現代中欧世界の歴史 ― 都市ウィーン」を手始めに、続いて拙著『理論社会学』をもとに「社会システム論」、さらに「社会理論」については、『石原慎太郎の社会現象学』をもとに、フル・オンデマンド講義を制作し、どれについても、3年から4年のインターバルでリニューアルしながら続けていった。





大教室での講義とは異なり、ネットを介してではあるが、疑似対面関係であり、かつ各回、小テスト、課題小論文などを組み込みながら進めていく講義は、大いに意味があったと考えている。全学オープン科目として、2016年度の「社会理論」は、700人を超える受講者を記録した。



政治経済学部から先進理工学部まですべての学部学生と接することができたのも素晴らしかった。

当然、こうしたオンデマンド講義は、かつての通信教育と同様で、受講側の熱意が不可欠であり、どの講義も、いい加減な受講のために履修者の3

分の1が落第するものではあったが、他方で、全学のたいへん優れた学生と接することができ、なかには米国留学に際して私が他学部の学生の推薦書を書くという機会もあった。

「対面」こそという意見もあるが、それを超えた新しい次元の大学授業であると思った。ただ、その必須条件は、授業に受講者をどれだけ集中させるかということだったろうと思う。そのための工夫は重要である。

それと、改めて思ったことは、早稲田大学には多数の学生がおられるが、「量より質」ではなく、「量が質を決める」という風土のままであるということだった。

19. 社会調査実習

助手時代を含め教員生活 41 年、そのうち 23 年、最も時間を投入したのは、第一文学部配当の「社会調査実習」であったかもしれない。これは、90 分授業と言いながら、半日どころか、毎日、調査実

習室にいないといけない、まさに実習であった。

1987 年度、1989 年度、1990 年度は、池子米軍家族住宅建設反対運動を調査対象とした。1988 年度は、テレビ・コマーシャルの言説分析を試みた。そこで思ったことは、映像よりも、学生は外のフィールドに出たほうがよいであった。



1991 年度は、統一地方選挙を主題に、区長選挙、区議会議員選挙への投票行動と意識をめぐって練馬区を集中的に調査した。ポスト冷戦時代となり、自由民主党が、党中央と、東京都連とで分裂して異なる候補をそれぞれ立てた選挙であった。

そしてこの年度は、たいへん精力的な報告書をまとめ、仲のよいクラスであった。ということもあり、それまでの調査実習メンバーたちが集まって懇親会

を開いた。



1994 年は、「責任ある変革」を掲げて登場した細川護熙内閣を主題にした。この間、在外研究で1992 年後期、93 年前期と、結果2年あいたことと、バブル崩壊後の不景気が就職状況に影響して、学生たちに変化があり、私とじっくり行かない年度であったように思う。

思ったのは、細川の日本新党について、あるいは日本の政治の変化について、さほど関心がないのではとさえ感じた。

学生担当教務主任、早稲田祭教職員側委員、教育の国際化検討委員などに時間を割かれ、しばらく時間があいて、1998 年度は、心機一転、青島都知事誕生、世界都市博覧会中止を題材に、港区台場

で、これまでに倣って調査票郵送、学生調査員が訪問回収する方法で実施した。



しかし時代が変わったことを強く感じた。とりわけ高層住宅は、オートロック、表札がないのが普通となり、訪問調査は難航し出した。そして学生の意識の変化だろうか、フィールドをつねに回っていた私は、回収中のある学生に出会った。ねぎらおうと思ったら、連れの女性がいて、「どなた」と聞いたら、「彼女です」と無邪気な反応。調査実習も、彼女同伴かと驚いた。

この年度が、調査員派遣訪問回収の最終年度となった。

1999 年度は、この年に行われた東京都知事選挙で石原慎太郎が当選したこともあり、その投票行

動と意識を主題に、郵送調査を、東京都内8地区（練馬、杉並、港、新宿、国立、江戸川、大田、多摩）、各選挙管理委員会で投票者名簿からサンプリングして、6400 サンプルを抽出、2300 サンプルを回収した。この種の大規模郵送調査を、社会調査実習の軸にしていけばよいと思った。しかしながら、これは莫大な郵送費用がかかることが深刻な問題であった。



2000 年度は、予算が枯渇したこともあり、また前年度に膨大なデータを収集したので、これの分析と報告書をまとめることを主題に調査実習を行った。これも、SPSS はじめソフトウェアの利用習得とともに、社会統計学の基礎知識を実際に学ぶということ

では意味ある実習となった。

2001 年度は、これを受けて、データを CD として公開提供されるようになった国勢調査データを利用した調査実習とした。



フィールドに出ない郵送調査、そしてコンピュータに向かったの分析、報告書も電子媒体となり、社会調査実習が大いに变化せざるをえなくなったと実感した。

社会学の調査実習室であった 126 教室もそこに至る過程でコンピュータ・ルームに改造していくことになった。その設計は、そもそも私が行なったものであった。

再び在外研究で、2年あいて、2004 年度は、やはり 2001 年の東京都知事選挙の投票行動と意識を主題にした。

しかしながら、いよいよ個人情報保護の時代となり、選挙人名簿の目的外利用は不可能となり、これまで行なってきたサンプリングが不可能となった。代替した方策は、ゼンリンの『住宅地図』を用いてサンプリングするという方法である。これにより、東京都内7地区（杉並、港、新宿、国立、江戸川、大田、多摩）から 6300 サンプルを抽出し郵送調査を実施した。



回収状況は、杉並 23.4%、港 17.2%、新宿 20.0%、国立 23.3%、江戸川 16.1%、大田 19.8%、多摩 19.6%となり、面白い地域差が出た。

さらに 2005 年度は、同様の方法で都内4地区（品川、豊島、葛飾、立川）から 4800 サンプルを抽出し、22%の回収率を得た。基本主題は、東京都知事選挙での投票行動と、とりわけ石原慎太郎都知

事についての意識であった。

これらは、まさしく拙著『石原慎太郎の社会現象学』へとつながる基本データの収集であった。だが、社会調査を実施する環境が、対象者選定の困難とともに、政治状況への学生の問題意識の減退を大いに感じるようになったことも事実だった。

2007年度から、文化構想学部、文学部の開設で、長く続いた第一文学部社会学専修の調査実習は終わることになり、私も文化構想学部社会構築論系に移ることとなった。そして、私の経験的社会研究も、社会調査実習によるデータ収集から、マクロミルのようなネット調査を専門とする企業に委託した調査となっていくた。

これは、手間がかからないのであるが、調査票を議論しながら作り、また回収する際に見える社会、人という発見はわからなくなっていく、とりわけ若い学生にとって、調査がデータ分析のみの世界へとなっていく、フィールドとの関係が大いに変わった。

文化構想学部社会構築論系に移り、「共通演習」

と称して、2008 年から 19 年までは、私がネット調査会社に委託した調査データ、あるいは私がこれまで行なってきたインタビュー・プロトコル、自由回答を分析する演習と、社会統計学の基礎を学ぶ演習を進めて行った。

前者は、さらに 2019 年から 22 年まで、Google Form を用いてアンケート調査を行ない、データを SPSS で使えるように加工し、今風の社会調査実習を実施した。

これは意味があると思ったが、受講生の、とりわけコンピューター・スキルに能力差がありすぎ、なかなか焦点を定めにくい問題が浮かんた。

学年進行のカリキュラムを崩した弊害である。学生が、自由に「好きな」科目を履修することを優先したために、能力的に、自分がどの位置にいるのかわからなくなってしまうという、大学での学び方に改良せねばならない深刻な問題が生じていると思った。

高級なスマホ、i-book を持って授業に出ている

が、Word と Power Point あるいはブラウザーしか使うことができない学生が少なくない。

第二外国語を捨て、コンピューター・スキルもないという深刻な問題が、文化構想学部、文学部のカリキュラムには存在していると思う。これは、教員側の責任でもある。どんな仕事をする場合にも必要なスキルを身につける機会を大学は提供しなければならない。

社会調査に必要な費用は、2年生のときに社会学専修に進級し、卒業までに3年間、半期 5000 円、合計ひとり3万円、22 人の実習生であれば、66 万円が最大の予算であったが、実習期間中、合宿費用に使用すると、ほとんど調査には使うための費用捻出ができなくなった。

理工学部教員などは、合宿は、学生自弁が当然だと言い、また金額では数倍の実験実習費を授業料と併せて集金しているが、私は、こういう金持ち当たり前主義の発想には終始反対であった。

社会調査は、調査者と、チームの力が絶対であ

り、たんなる実験、調査そのものだけで成り立つはずはないし、理工学部のように支援職員が配置されているわけでもない。

裕福な家庭の学生ばかりではないことを知れば、合宿さえも、大変な費用負担に感じる学生もいる。社会調査で現地に泊まり込むこと。あるいは調査票回収にかかる交通費も必要なものであった。

その上で、調査票印刷費、郵送費用、録音テープなどの費用、報告書印刷、郵送費用など、その工面はたいへんなことでもあった。

早稲田大学の教員であるので、在野精神の実践をせねばならず、官有物払下げ事件を思い出さねばならないわけではないが、税金が原資である官の研究費は、基本的に頼ることはしない方針であったが、社会調査実習の調査規模を充実させるためだけに申請、使用することはした。

1987 年度科学研究費補助金奨励研究 80 万円、1994-5 年度科学研究費補助金 基礎研究(C) 160 万円は、池子米軍住宅建設反対運動調査。

1998-9 年度同基礎研究(C)110 万円、2004-5 年度基礎研究(C)310 万円は、東京都知事選挙投票行動調査のために申請し、調査実習費ではまったく足りない調査票郵送費などの費用とした。6000 通になると郵送費だけで 100 万円を超える。

2009-10 年度同基礎研究(C)370 万円は、やはり東京都知事選挙投票行動調査、これは調査会社外注で、パネル調査として繰り返し、社会構築共通演習でデータを使用した。

20. 演習とゼミ

「社会調査実習」という実習科目は、たいへん特異であった。第一、第二文学部ともに、当然のことであるが、講義科目とともに、演習科目があった。

「実習」とは異なり、古典的には文献講読、資料読解と議論により成り立つと考えてよいが、既述のとおり、そこで村上泰亮『新中間大衆の時代』、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』（中央公論社）、上野千鶴子『主婦論争を読

む』から、広くマルクス『経済学・哲学草稿』『ドイツ・イデオロギー』、ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『社会科学および社会政策の認識の客観性』、デュルケム『自殺論』『社会学の方法的規準』など有名著作について扱う演習も担当してきたし、ドイツ語原書講読では、Habermas, *Glauben und Wissen* も読んだ。

1996 年第二文学部のカリキュラム改革により、それまでの社会専修では主要には、上述の社会科
学者を中心に精密講読をしてきたが、思想・宗教系
専修に移ってからは、カッシーラー『シンボル形式
の哲学』、フッサール『デカルト的省察』の精読も、
少人数のたいへん充実した演習で読み通すことが
できた。



まさに、早稲田大学に来る学生には、そういう能力を備えた人が少なからずいるということであった。それぞれに優れた学生たちと遭遇することができたことは、私にとってかけがえのない宝となった。

第一文学部、第二文学部ともに通年、あるいはセメスター単位の科目として、講義、演習、さらに実習を配置してきた。

私は、これがベストだと思ってきたが、政治経済学部、法学部、商学部、あるいは歴史的には慶應義塾大学経済学部が行なってきた2年制の「ゼミ」制度を設置することが、新たにできる文化構想学部の特徴だとされた。私は、これに終始、そして今も反対である。同じ教員と2年間もつながっていることは、百害あって一利なしだと思う。

若い知性は、さまざまな人と出会う必要があるし、カリキュラムは、チームで成り立つものでなければならない。余人をもって代え難しと選ばれた専任教員が、在外研究、国内研究で、ゼミゆえに、自分に代わる非常勤講師に容易に任せる無責任より

も、専任がチームでカバーできることが必要であり、専門性よりも属人性が強いゼミ制度には批判的にならざるをえない。

しかし日本的「ゼミ」待望の雰囲気は教授会決定となり文化構想学部開設、その初年度学生が3年となる、2009年度から「ゼミ」なるものが始まることとなった。



2年間4セメスターあり、第1セメスターは、社会科学の基本概念の習得と確認、第2セメスターは、それをもとに現在まさに問題となっている社会事象について分析報告をする。第3セメスターは、次年度生の第1セメスターに討議者となること、第4セメスターは、卒業論文（ゼミ論文）を仕上げるという内容で、2年制ゼミを編成していった。



日本社会学会で言う、いわゆる「社会学」から離れ、文学部社会学コースとも切れ、文化構想学部社会構築論系という、新しい世界での展開であり、そのこともあり、2015年度から、拙著『理論社会学—社会構築のための論理と媒体』を第1セメスターの教科書として用いることにした。

ゼミは、2009年度から2025年度まで続けた。もちろん、早稲田大学にやってくる、そして私の「ゼミ」を選択してくれる学生たちは選りすぐりであり、第一、第二文学部のときには経験しなかったが、2016年度には卒業論文により「小野梓記念学術賞」を受けた学生もいる。



私が心がけたことは、日本の大学の「ゼミ」という
悪しき時空。まさに山崎豊子や花登筐による船場の
商家もののような徒弟世界、「弟子」を作ること、
「先輩—後輩」を作ること、あるいは気の合う仲間
だけ選抜した学生同好会、あたかも士官学校、兵学
校のように「〇〇ゼミ第〇期」などという年次序列
のある勘違いした、さまざまな時代錯誤だけは、絶
対にするまいということであった。

私が教えることは、社会科学の方法であり、素材
は学生が自由に創意工夫で選ぶということを徹底
したつもりである。

上述の小野梓記念学術賞受賞作品も、私がかか
わってきた研究素材とは異なるオリジナルなもので
あった。「ゼミ」を進めるのであれば、教員とはまっ
たく違う学生たちの、どこかにありうる特徴を延ば
すこと、これに寄与することに注力したつもりであ
る。



それと併せて、敢えて付け加えれば、同年、あるいは前後3年の人間関係が生まれ、それが時を超えて、私にとって、かつての子安先生のドイツ語クラスや、丹下先生の社会学研究や社会学演習のようであれば、あるいはかつての演習や実習における人間関係が生まれれば素晴らしいということであった。

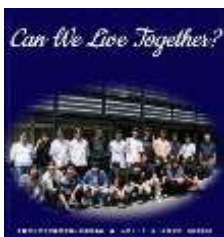
さて、文化構想学部ゼミ 16 年をふり返ると、2018 年度以前と、それ以後、学生の雰囲気に変化したと感じている。あるいは、私が歳を取ったゆえかもしれない。

2007 年度に入学し、2009 年度から「ゼミ」に参加した学生たちは、「文化構想学部」という、それまでどこにもなかった名称の学部であり、何もないと

ころからの始まりであった。

実際、文学部が第一文学部の施設を継承したため、例えば社会学実習室のようなものも、専用のコンピュータ・ルームもないところから始まったこともあり、また戸山キャンパス建て替えて、始まりはプレハブ教室であり、私のゼミは、本部8号館のゼミ室を使用させてもらっていた。

学生のことを思い、施設の融通をしてくれてもよいものだと思ったが、なんとも頑なであった。



そういう劣後環境ゆえにか、学生自身が、たいへん主体的に動いたと感じるし、社会構築論系全体で学生の交流を作っていくための「社構会」の運営も、森ゼミの優れた学生たちが、リードして進めてくれた。



これに変化があったとしたら、「文化構想学部」というものが、ブランドとなったということなのだろう。いわゆる偏差値においても高く位置づけられ、ある種の安堵が生まれたということかもしれないし、経済状況が、アベノミクス以後、表面的に好転し、就職状況が活性化したということもあると思う。

2011年3月、東日本大震災により、文化構想学部最初の卒業生たちの式も中止となったし、それからしばらく、あらゆる点で厳しかったと思う。「就活」でまわる企業数も桁違いの多さであったが、経済状況の変化とともに、学生の意識も大いに変わっていったように思う。

特徴とされた「ゼミ」も、講義科目、演習科目とならぶ、ひとつの科目でしかなくなっていったのであろう。言い換えれば、単位取得が得られればという

時代となり、これを学びたいゆえに、このゼミというよりも、「人気だから」「みんなが選ぶから」という類いの選択が行われているように感じたこともあった。

その原因は、体系的なカリキュラムで学ぶという前提が崩れてしまっているからであろう。「大学へ入ったら、好きな科目を好きなように取れる」と、高等学校までの受験オンリーの詰め込み暗記世界からの誤った解放のように思う。

かつての社会調査実習のように、社会経験が圧倒的にある大人たちと接する緊張感、あるいは図書館に籠もって文献資料をわかるまで渉猟するが学問であるという時代とは違う現在となり、机には、つねにノートパソコン、タブレットがあり、検索すれば瞬時に答えがわかり、ときには報告も、スマホにあるメモで可能な時代となった。

教室という時空自体が、Zoom の利用進展とともに、大いに変化している時代、昭和 10 年代に生み出されたニッポンの「ゼミ」。この発想は、その時

代、大学進学率 10 パーセントに満たない時代、大学に行くことができた裕福な青年たちが、特定の学校を通じてだけ、就職に、研究者養成に、有利なコネクションを享受できるための場として考案された慣行と私は理解している。

そうした歴史的に特異な慣行が、今も、機能していて妥当なのかということは、是非、問うてもらいたいと思っている。

21. 大学院研究指導

1990 年代、大学政策の変更により、旧帝国大学の大学院化が始まり、それに倣って、早稲田大学も学部と研究科を併せて「学術院」という自前の制度で対応することとなったし、その頃、教務にかかわっていた。ただし、個人的な感覚から言うなら、膨大な数の学部生の授業料収入で成り立っている私立大学ということを考えれば、やはり中心は学部教育だろうと思った。

私は、相対的に若かったということもあろうが、

1999 年まで社会学教室で最年少であったので、後から嘱任してきた博士号を持っていない教員であっても、年功序列により大学院担当となるも、私自身はそのまま学部担当教員であった。

それは、それで、給与の前提が膨大な数の学部学生の授業料が原資だと知れば、とりわけ不満はなかったが、大学教員とは、権威が好きで、名刺に「大学院教授」などと刷りたい人ばかりである。

1997 年度に「社会学特論」、1998 年度「社会学演習」、そして 1999 年度から「社会学演習」と「社会学研究指導」を担当し、大学院にも関わるようになったが、2014 年に、ジョイント・セミナーのところで触れたが、大学院教育からは退任することにした。

その間、修士論文については、主査5本、副査は大学院担当する前も含めて 22 本の審査をしてきた（本稿末参照）。所属した文学研究科がアカデミック・スクールであり、実用的なビジネス・スクールではないゆえに、基本は学者養成という機能しか持つ

ていない。

安くない授業料を考えれば、入学試験において、あるいは学部卒業論文により、ほぼ将来への可能性が決まっていくことを考えれば、人数だけ増やすことには大いに責任を感じて、そもそもの担当が私には不適であった。それほど、優秀な研究者でも教員でもなかったからであるし、弟子を作ることが主目的の人たちとは距離を置きたかった。

ただし、唯一の例外、すなわち私自身の研究関心との関連で、卒業論文、修士論文を踏まえて博士論文を仕上げた優れた人がおられる。

2011 年博士学位を取得することになった、多田光宏先生（熊本大学教授）による博士論文「社会的世界の時間構成 — 社会学的現象学としての社会システム論」という大作であり、2013 年ハーベスト社から刊行されている。この研究は、私自身の関心と重なるが、独創的な展開であり、博士学位にふさわしい作品であった。

私の大学院演習には、2008 年には、面白いこと

にドイツから、「ニコラス・ルーマンの研究」をテーマに日本学術振興会給費留学生として、1年間、私の大学院ゼミで学び、ドイツに帰国し修士号を取得した学生もいる。

博士論文について主査は、上述の一度だけだが、副査は、3度経験した。4人それぞれに、大学で専任教員に就いておられる。

私の教員としての仕事の軸は、繰り返しになるが、学部において、学生たちに出会いを提供することであり、それは例えば学問であり、例えば海外、国内の、どこかの時空であり、例えばかけがえのない友人ということであり、さまざまな通過点をつなぐものとしてだけあったということになる。

その結果、私の学部教育において学問と出会い、国立大学などに進学され、学位を取得し研究者となられ大学で教鞭を執られている方々を数えると、これまでに10人おられる。私の存在意味があるとしたら、そういう機会を得ることに、何らかのきっかけを提供できたかもしれないということで、これは有

り難しいことだと感じている。

22. 『ヴェーバー後、百年』

2023 年 10 月末、『ヴェーバー後、百年 ― 社会理論の航跡 ウィーン、東京、ニューヨーク、コンスタンツ』（東信堂）を出版した。これは、私の研究のまとめである。

『アルフレート・シュッツ ― 社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』（新評論 1995 年）以後、シュッツについての研究で進められてきた成果、ひとつは、1997 年から始まったドイツ語版全集編纂の成果、今ひとつは、1999 年から、繰り返し開かれてきたシュッツをめぐる国際会議での私の報告、そこから論文となった諸成果を踏まえ、これからの社会がどのようなようになっていくかをめぐり論じた。

「face-to-face」のみならず、新たに出現した「peer-to-peer」の展開、「wired brain」と言語、意識の関係が、シュッツの功績である社会的諸世界、すなわち、直接世界、同時世界、先行世界、後

続世界に、どのように関連していくかを問題とした。

併せて、これまで行なってきた経験的社会研究の主題「普通の主婦」「緑」「民主政」「貨幣」などの諸問題を、通奏低音にして、間接に、あるいは暗喩として触れた。

例えば、2007 年ウィーンで報告したものをベースにしているが、第5章の尾高朝雄論、あるいは2022 年日本社会学史学会で報告したものだが、第6章の北米におけるプロテスタンティズムとパーソンズの社会観、2023 年やはり日本社会学史学会で報告したが、第10章のルーマンと意識哲学を収めた。

第7および8章には、フッサールとシュッツの現象学の異同について書き下ろした。さらに第9章では、ハーバマスによる意識哲学の言語論的転換の前提について論じた。

「生活世界」と、わかったように言われる、フッサール、シュッツ、ハーバマス、ルーマンにおける相違を明瞭にし、意識、無意識に口にする「社会」「日

常」について考察していった。



社会理論について、結論があるとすれば、1968年ハーバマス『認識と関心』での、認識批判の徹底をつうじて類的存在が剥き出しになり、それにより社会理論が可能となるというネガティヴィズム、批判理論ということ、これに尽きるだろう。

言い換えれば、連帯、共生、相互理解などのフレーズを肯定的に羅列するポジティビズム、実証主義は採用しないということになる。「社会」「日常」は、それほど孤立、排除、相互不信がリアルなはずである。

経験的社会研究において得られた知見、例えば「普通の」が冠せられた「主婦」は、どう普通であったか、「300万得票した都知事」は民主主義の成果か、長期銀行制度は誰のためにあったか、1920年代、金融化に成功した寄生地主、戦争成金層の維持存続のためかなど、その存立を問わねばなるまい。

それをつうじて、それゆえに社会理論は、つねに経験的社会調査と表裏一体で、フィールドとともに、理論そのものを問うリソースをアーカイブに問い求めるということである。

アーカイブへのポジションは、データの確認はもちろんだが、そのデータ自体の成立を問い続けることも不可欠である。

さらに言えば、1920年代の、例えば細民調査も重要だが、なぜに『細雪』のような世界もありえたか。投票行動調査も重要だが、理念、思想、理論なく、金だけの世襲政治屋が、なぜ居続けるのか。

人の収入、所得を調査できるが、なぜに資産格

差は問題とならぬのか。それにもかかわらず、なぜにかつての日本は平等だったなどと言ってしまえるのかなどということになるか。

23. 認識批判と分析理論

そうした永年の問いは、2024 年 10 月、東京のドイツ日本研究所で開催された第 17 回ドイツ・日本社会科学会での報告“Feudalization of Re-Feudalization -Where is ‘Modernity’ in Japan?”となった。

その前回、2022 年上智大学での報告は、かつてジョイント・セミナーで一緒にしたツェルナー先生の著作『真理効果と論争 ―〈従軍慰安婦〉とその像』(Reinhart Zöllner, *Wahrheitseffekte und Widerstreit -Die „Trostfrauen“ und ihre Denkmäler*, Indicum Verlag München 2021) についての書評であった。

戦時性暴力、そして「従軍慰安婦」をめぐる日本、韓国での政治的議論とその混迷をめぐって、討

議を形式的には行うが、歴史が没歴史的となり、批判応酬の内戦状態、無視となるのは、どこに原因があるのかについての分析であった。

ツェルナー先生の結論は、討議はするものの、「語り」が、西洋、キリスト教文明においては、本来持ち得た普遍的愛へのベクトルを、日本的議論においては欠いており、「語る」主体の顕示に帰属させてしまい、合意、一致となるべきことが、対立、反目、そして妥協になってしまう問題を、リオタールを引きながら論証したところにあった。

これは、まさしく欧米の日本学による日本分析の成果であり、1978年、ヴェスさん、リンクホーファーさんとの出会い以来、問うてきた「日本学とは何か」への、私の到達点であったのかも知れない。

社会研究、歴史研究と称して調査し報告し論文にするも、その「語り」は、出来事の普遍性、とりわけ人類愛という普遍に帰着せず、誰が語ったかに集中し、学も個別主義、研究者の好嫌に帰着し、真理追求が忘れ去られてしまい、政府公式見解獲得

要求として政治化していくことになる日本的特質であろう。

こういう論点を踏まえて、第 17 回大会で、「再封建化の封建化」として、そもそも日本の民主政、議論には理念、理想、理論、思想がなく、あるのは妥協、コネクション、カネ。これらが基本媒体であり続けてきたこと。その原因は、遡れば 1920 年代来、克服されない寄生地主、戦争成金に帰着する世襲政治の継続にあると考えた。

学問も、認識の客観性よりも、政府公式見解のお墨付きが重要となってしまう、歴史家が没歴史的、社会学者が没社会的であるようになってしまう問題が残り続ける。

真理性は、ハーバマスと真理の合意説、フッサール、シュッツの真理の明証説として、駆け出し論文から、『ヴェーバー後、百年』まで扱ってきたテーマでもあったが、解決の道は、おそらくキリスト教文化を欠く日本においては、「自然的態度のエポケー」という、シュッツが示していた思想呈示のポジション

を学びとることであろうと思っている。

キリスト教文明を欠くとしても、「デカルト的省察」を実践することは可能なはずであろう。思想、理念、理論は、語る主体自身の利害関心から自由になれると考えることができると思ってきた。

だが、社会的世界が、peer-to-peer とともに変化し、人(person)が、人間、法人を超え、AI、アンドロイド、サイボーグと共にありうる世界となりつつある。

理性、知性、感性とともにある思想、理念、理論が、これまでのままだありうるかについて、私は、とりわけ日本において、楽観的にはなれない思いがある。

これに続き、2025 年 4 月、心の思い出の地ウィーンにて開催された国際シュッツ会議で、
“VOCALOID and Re-Incarnation -Multiple Transformations of Multiple Realities”と題して、AI が、人間世界を変えていき、多元的現実が変容しつつあることを、シュッツの、1932 年の社会的

世界論との関係、また 1936-7 年の草稿にある「人 (person)」とは、どのように現れ出るかに立ち返り論じた。「個人が社会を作る」「社会は個人の集まりである」という素朴無垢な前提を捨て去るべしという主張でもあった。

人間ではないアンドロイドが、歌い語る時、何が明示、暗示されているのか。人間ではないアンドロイドが、理念、理想、理論を提示することもあるのだろうか。

24. 卒業論文とゼミ論文

専任講師となって 39 年間の教員職務の間、第一文学部で 166 本、第二文学部で 45 本の卒業論文、文化構想学部で 186 本のゼミ論文、1 本の卒業研究を担当し、合計 398 本となる。

私立大学であるゆえの数の多さはあるが、先述のとおり、「量が質を決める」というのも事実である。たくさん優れた作品があり、印象深く、懐かしく、かつたいへん有り難いことである。本稿末に、その

題目一覧を掲げておく。

25. 私立大学教員

1985 年助手、当時は法律も大学規則も教員の職位のひとつで、給与も今よりよかった。実際、私の前々任者までは任期もなかったし、政治経済学部、法学部などでは、助手の間に、助手の給与をいただきながら留学もできた。それが、3年任期制となり、今は2年となった。たいへん幸運にも2年で専任講師となった。

しかし名称とは違い、講師の専任ではなく、さまざまな業務が溢れていたという点では、助手の延長であったのかもしれない。3年経て助教授に、さらに5年経て、1995 年教授となった。

助手にしていいただき、源泉徴収される給与をもらうようになって、最初にしたことは、パソコン PC-9801Vm2 とプリンター PC-PR201H、さらにワープロソフト—太郎を、桜台の狭いアパートの一室に買い入れた。それは、今考えても高価だが、全部併

せて 80 万円近くかかった。パソコンが、たいへん高価な時代だったということかもしれない。

助手となった時、大学の仕事場は、32 号館 101 という書庫併置の部屋に先輩助手浦野正樹先生（早稲田大学名誉教授）と同室。

ここでの忘れ得ぬ出来事は、1984 年 7 月、その室の上階にあるトイレが壊れ、汚水が大量に降ってきて浸水したことである。大量の書籍を避難させるのは体力技であった。

さらに、夏休み、汚染された大量の書籍を、本部図書館の燻蒸炉に運び、またもとに戻すために軽トラックで往復する日々に見舞われた。「助手」は、「助けてー」と読むのだと教えられ、ソシオロジーではなく、スカトロロジーだと笑われる始末であった。

教授と言っても、ドイツ語圏の制度のように、博士号取得の上、Habilitation を認められ教授となるのとは違い、余程のことがない限り、みんな教授になるのが日本の、とりわけ私立大学教員であり、それが大学の「民主主義」だと勘違いしている人も少

なくない。

助手から専任講師にさせていただき、旧 33 号館4階の研究室に移った。しかし、ある教授先生と同室。形式的には「同室」だが、私は、8 時 20 分開始のⅠ限、18 時開始、21 時終了の6、7 限、そして土曜日に授業ということに自然となり、顔を合わせないようになっていた。

たまたま用事があるって入る際は、自室のはずだが、深呼吸をして意を決して入ることになる。教授先生、そして序列ある門下生多数のまなざしを感じながら「すみません」と言いつつ出入りする世界であった。徒弟制、身分制であると改めて感じる時であった。

個室となったのは、1993 年であり、そこにエアコンが設置されたのは、1998 年だった。学生時代は、図書館のみ空調があったが、総長室も扇風機。教室の空調化が始まるのは、1990 年代からだった。

研究室よりも、業務作業のため、どこかへという時代だった。授業、研究が仕事だろうが、それ以外

に膨大な仕事があり、若かったのと、器用であったので、その種の仕事が多々あった。

野球早慶戦、ラグビー早明戦あとの歌舞伎町見回り、ミルクホールや0番教室、旧第一、第二学生会館、3、8、9号館地下部室撤去など、普通の大学教員がする以外の業務に従事した。

手当が支給される入試出題に当たったことは41年で1度。採点は10度ほどか。通常業務に含まれる大きな教室での入試監督は、ずっとやってきた。

数年前だが、卒業前、ある学生からメール。「4年前、入学試験のとき、私はたいへん緊張していましたが、監督をされていた先生が冗談を言って、教室中が笑いに包まれ、それで固さが取れて、憧れの早稲田大学に合格できました。有難うございました」と。若い人たちが喜べばそれは素晴らしい。

教員組合書記次長、中央委員会議長を務めたこともあるが、これは労働環境改善に必要な仕事だった。わずかな日給が出たが、すべて積み立てて、任期終了後の慰安旅行費用となった。

1996 年から 98 年まで、学生担当教務主任、2004 年から 6 年まで教務担当教務主任を務めた。これは、さすがに役職手当が、月 22,000 円付いた。ただし、前者はミルクホール正常化など、また後者は文化構想学部、新・文学部開設準備など、通常外の大きな業務に従事せねばならず、労働に見合った手当ではなかったと思う。

文学学術院は、第一、第二文学部の時代より、学部長はじめ役職者は2年任期退任が慣行。他の学部の2期4年慣行とは違っている。それらに淡白であるのかもしれないし、またキャビネットの仕事は、教授会内に選出された各種委員会での決定の履行であり、長やキャビネットのリーダーシップが前面には出ない、日本的政治風土の中にある。

民主政が研究主題のひとつでもあり、そんな政治風土に抗して、2016 年、学術院長選挙にひとり立候補した。得票数 30 で落選した。推薦人が一定数名乗り出て、その人たちに推されて、言い換えれば、選挙をする前から、裏で決まっている、まさに日

本的政治風土そのもの。これは、好きになれない慣行であった。

役に立つことをしたとしたら、大学年金委員会という、総長、理事会の下にある委員を20年務めたことか。

バブル崩壊後、低金利時代が始まり、それまで信託銀行預金に置いておけば、年4パーセントから付いた金利がなくなり、素人投資の典型で、コンサルタントに従いアクティブ運用にかかわるが、ネットバブル崩壊で損失。コンサルタントが止めるにもかかわらず、慌ててしまい、現金化して損失だけ確定する事故があり、給付減額という事件があった。

その直後から、この委員会に加わり、20年、基金は2倍以上に成長していった。今後、どうなるかはわからないが。

もうひとつ、健康保険組合の理事長も務めた。高齢化社会との関係で、日本の組合健保の将来が難しい時代。定型業務だが、厚労省との関係での業務で、監査されたり、監査したりなど、普通では遭

遇しないことを多々経験した。企業の健康保険組合では、多額の手当報酬があるが、早稲田大学健康保険組合は無給無手当であり、ボランティアの実践に他ならなかった。

助手を含め教員ということでは、早稲田大学第一、第二文学部、文化構想学部で41年、教育学部で半年、東京大学(1992、1999年)、東京都立大学(1996年)、東北大学(2001年)、大阪大学(2001年)で非常勤講師をさせていただいたが、早稲田大学戸山キャンパスが、仕事のほとんどの場であった。

ただし、面白いことに、教育学部で学んだからか、いつも他所にやってきたという感覚があり続けた。実際、同年代の同僚は、圧倒的に第一文学部出身者が多いということもあるのだろう。

それが悪いことだとは思ったことはないが、身内・内部選考の時代が終わり、言うところの公募制度で人材を集めると言いつつも、どれくらい公正で客観的評価が可能なのかについては、少なからず疑問

もある。

結果、たしかに早稲田出身者という履歴が薄くなっていくかもしれぬが、出身校が同じであればあるほど仲が悪いということもあるし、出身校が違うが、しっかりつながっている人たちも少なくないのが、大学教員のコネ世界でもある。

もうひとつ、奇異な経験を挙げると、日本社会学会大会の開催事務を、1988年、第61回大会では、数十ある部会の教室配置と進行管理、そして2015年、第88回大会では大会参加費の計算管理と、二度にわたって運営の実務労働を経験したことだろう。

在職中、繰り返してというのは、たぶん珍しいと思うが、現場作業員として従事した。夜更け帰宅、早朝出勤、当日はホテル宿泊も自前、懇親会費をたてまえ上、支払うも、作業で出席できないという、何とも思う気配り。

26. 高校時代をふりかえって思うこと

私は、1975 年早稲田大学教育学部社会科学専修に入学した。失礼ながら第一志望ではなく不本意であった。ただし、一浪をしており、贅沢な我が儘でしかないが、またたいした能力もなく、他の選択肢もないということで入学した。そういう点では、けっして褒められた入学ではなかったが、早稲田大学がたくさんの出会いを提供してくれた。

大阪で生まれ、3歳のとき、西宮、門戸厄神にできた父が勤める会社の社宅へ。小学校4年生のとき、祖父母と同居するということで芦屋へ、芦屋から門戸厄神にある小学校へ阪神、阪急電車を使っての越境遠距離通学、しかし5年生のとき父の栄転で東京品川区大井町へ。

中学2年のとき大井町の社宅がビルに建て替えとなり、大田区雪が谷へ転居、1年通った品川区の中学校へ、東急池上線、田園都市線（現・大井町線）を使っての越境遠距離通学。

中学校3年8月、父の栄転で名古屋千種区へ。東都府の高校受験科目は3科目、愛知県は5科目で

蒼くなった。何が何かわからず、愛知県立昭和高校に入学した。いわゆる一流校、御三家、名門校などという世界とは違い、おそらくそういう学歴ニッポン社会への勘違いが、私にもどこかにあるはずだ。

しかし現実は一厳しく、高校3年秋に、借りていた社宅建て替えて、千種区から東区に転居。父は、会社が近くなり便利だっただろうが、私は東区から瑞穂区まで、ほんの短い期間だったが、通うことになった。

陸上部を大いにやったわけではなかったし、勉強ももともと能力もないのもあるが、それも大いにやったわけではなく、当時は「ひとなみ」と読んだ一浪をして河合塾千種校へ通った。

が、また同じことの繰り返しで、その夏、父はさらに栄転して大阪本社へ戻ることになり、私は瑞穂区瑞穂通りにアパートを借りてのひとり住まいとなった。

早稲田大学に入って、私と同様に下宿して浪人という人がいたのを知り、私だけではないのかと知っ

たこともあるが、当時は、なかなか辛かった。

スポーツについても学業についても、とくに秀でたものはなかったが、その後につながっているとしたら、高校1年生のとき、難しいで有名な先生の「地理」。

最初の中間試験で、たいして勉強をした覚えもなく、また答案を返される日も、陸上の試合で公欠だったが、先生が「森はどこにいる」と探していたぞと、翌日、クラスメートたちに言われ、職員室に行った。

毎年、平均点は50点以下の試験だが、「すごいな、90点を超えたのは、過去にもない」と褒められた。

「地理B」で受験をする生徒が少なかったからなのだろう。受験詰め込み授業ではなく、1学期は難問試験、2学期、3学期はチームでの報告発表議論という授業スタイルだった。

たまたま私の属したチームで取り上げたのが、

「パレスチナ問題」と「東ヨーロッパ」であった。そして当時、NHKで「特派員報告」という番組があり、たぶん毎週、観ていた。

どちらかと言えば、生物、化学、物理を好んでいたが、大学で、こういうことが学べれば、あるいは特派員のような仕事ができるにはと考えていたことがあった。それが、社会科学への関心の起点であったのだろう。

早稲田大学教育学部社会科学専修に入学して、クラス担任は赴任間もない大西健夫先生（経済史）で、この人はゲッチンゲン大学で博士号を取得し、早稲田のと併せてドッペル・ドクターで戻ってきたばかりであった。その若さに驚いた。

しかし、何よりも、3年生のときに、講義「社会学研究」で丹下先生と出会ったことが、大学教員への道につながっている。

結果、「特派員」「新聞」、ジャーナリストという、おそらく当時の早稲田大学の学生の多数が抱いていた就職希望選択肢は、私の場合、消えていくこと

になった。そもそも社会とは何かという、根本的な問いに向いていったのであろう。ただし、海外、とりわけ欧米への関心が強くあり続けた。

「特派員報告」もそうだが、中学生の頃から外国映画を、悪友と、あるいはひとりよく観に行ったというのもあったかもしれぬが、高校時代、ふたり格別の友と出会ったことが、決定的だったと思っている。

高校1年生、2学期が始まる時、カナダから帰国子女が転校してきた。お父さんが駐在していた関係だが、小学校高学年から高校1年生まで過ごしたゆえにだが、ネイティブであった。

英語の時間、先生が彼女に敢えて読ませた。まさに洋画で見聞きする発音であり、私たちとも、先生ともまったく違うことに驚いた。

親しくなって、名古屋、今池の映画館で『嵐が丘』を観た。私の初デートでもあったが、字幕を追ってもそこそこしかわからない私に対して、彼女はイギリスの英語で少しわからないところがあったと言
い、そんなものかと啞然と聞きながら、かつ私もそう

いうことが言えるくらい英語が上手にならないかと願った。

もうひとり、3年生のとき、バスケットボール部にいるのは知っていた人と席が近くなり、にわかに親しくなった。運動部のつながりで前から知っていたのだが、この人、すごい英語ができるなど感心した。彼女は、帰国子女ではない、普通の高校生。

しかし、どうしてそんなにできるのかに驚いた。彼女は、地元の大学を出て、アメリカに留学し、東京大学大学院を経て、一時、同時通訳者をし、さる大学で教授、学長補佐までなっていった。

このおふたりとの出会いがなかったら、18歳人口大学進学率30パーセントほどであった時代、普通の高校生から、偶然が重なって早稲田大学へ進んだひとりのままであっただろう。

しかし、英語も、ドイツ語も精進することなく、この年齢まで来てしまったが、何かやり遂げようという思いがあり続けたとしたら、このおふたりとの出会いが決定的であったのかもしれない。

おふたりには、大学へ進み東京で生活するようになり、それぞれに仕事を持ち、家庭を持つようになってからも、今に至るまで刺激を頂いている。

私とは、もともとの才能の違いは大いに感じるが、私の場合、とにかく質は量が決めるということであり、パーソンズ後、50年、シュッツ、ハーバマス、ルーマン、新しい社会運動、民主政、ポピュリズム、ウィーンをただひたすら追っていくことができたとしたら、おふたりのキラリと光る才能に魅せられた、そんな魂があったのかもしれないと思っている。

有難うございます。心から感謝をしています。

27. 最後にあらためて

たいへん長い期間にわたって、第一文学部社会学教室、第二文学部社会専修教室、同・思想・宗教系専修教室、文学研究科社会学専攻、文化構想学部社会構築論系教室の諸先生、助手諸氏、さらには文学学術院教授会の諸先生方から、多くのことを教えられ、多くの議論をすることができたことは、恵

まれて幸せなことでありました。心より感謝を申し上げます。

通常の教員業務のみならず、学生担当教務主任、教務担当教務主任、早稲田祭教職員側委員、教育の国際化検討委員、大学年金委員、教員組合、健康保険組合など少くない役務をつうじて、たくさんの職員の方々に多大なご助力をいただきお世話になりました。有難うございます。

在職期間中、合計 3399 頁 11 冊の著書を刊行することができました。それには、出版社、ならびに優しく、ときに厳しい編集者の方々に多大な助力をいただくことができ、それは御礼しきれぬほど有り難いことでありました。

助手をさせていただいていた時代、共訳書ハーバマス『意識論から言語論へ —社会学の言語論的基礎に関する講義（1970/1971）』の刊行を引き受けてくださった、マルジュ社の桜井俊紀社長、『アルフレート・シュッツのウィーン』『フリードリヒ・フォン・ハイエクのウィーン』では、新評論の二瓶一郎さ

ん、武市一幸さん、最初の教科書『モダンを問う ― 社会学の批判的系譜と手法』（1995 年）では、弘文堂の中村憲生さん、池子米軍住宅建設反対運動研究のモノグラフは、御茶の水書房の橋本盛作さんにお世話になり、心から感謝申し上げます。

そして「世界の社会学・日本の社会学」というシリーズで企画された中の一冊『アルフレッド・シュツ―主観的時間と社会的空間』（2000 年）以来、多くの拙著を刊行してくださった、東信堂の下田勝司社長には、永年にわたり、たくさんのことを教えていただき、心より感謝を申し上げなければならないです。本当に有難うございました。

しかし、何よりも感謝せねばならないのは、繰り返しになりますが私の授業で真剣に取り組んでくださった多数の学生諸氏であり、その機会を与えてくれた早稲田大学でしょう。有難うございました。

長い間にわたって、身勝手きわまりない私と、東京練馬三原台、高野台、ウィーン、逗子、そしてまた

ウィーン、逗子へと、いろいろなところへ連れ合ってきてくれたパートナーにも心より御礼を申し上げたい。あなたなしには、ささやかな仕事もなしえなかったでしょう。有難うございます。

そして、逗子拙宅の書斎で、いつも私の仕事の傍らで見守ってくれていた相棒にも感謝している。



別表Ⅰ 担当した「卒業論文」

第一文学部

1988 年度
日本人の個人主義と大衆消費社会
最近の市民運動に見る運動発生の土壌
働く女性の家庭に及す影響について
システム摩擦としての経済摩擦
池子問題における返子市民の意識と行動
返子市池子を巡る人々とドイツ緑の人々
性をめぐって
ブームの社会学的考察
女性と母性意識
現代社会と祈り
言語行為とコミュニケーション
現代日本人の意識
アマチュアスポーツにおける社会学的考察
1989 年度
2分法の社会学
しぐさの文化論
日本人意識と外国観
情報化社会の諸相
カタカナ言葉と現代社会
昭和から平成へ
市川市における少年サッカーの現状と意識に関する調査
封じこめられた時間
台湾ナショナリズムの形成と将来
広告のキャッチフレーズから見る現代人像
広告に見る外国文化

1990 年度
スポーツにおける日本人論
金ピカの'80年代
子供とテレビ
日本的経営論の再検討
広告の効果論
東欧の民主化に与えたマス・メディアの影響力
ジェンダーと主婦
家族の機能と親子関係
がん告知とその諸問題についての考察
離婚
1991 年度
「開かれた皇室」像
合法性と正当性
日本のデート誌
池子米軍住宅建設問題におけるビラ、ミニコミの働き
派生体としての『一般社会学概論』
サッチャリズムに関する一考察
フロイト論比較
「脳死と社会」
輝こう ニューシルバー
1992 年度
現代のギャンブルに関する一考察
日本の原子力問題をめぐる社会学的考察
男女雇用機会均等法の足跡
物語としてのパサージュ
婚姻機能についての考察
1994 年度

行為理論における意味概念
マートン科学社会学の研究
文化の階層性と政治性
近代社会の合理化作用と「画一化」の問題
近代産業社会における労働と営利について
外国人労働者問題が示す日本社会
世論とマスコミュニケーションの実証的研究
現代日本の宗教状況
パンにみる日本人事情
1995 年度
在日朝鮮人のアイデンティティー
社会調査報告書と言語の関わりについて
舞踊にみる近代
森林の危機
練馬区民の政治意識
欧州統合と文化の葛藤
戦後日本の「主婦」意識
社会変革の主体理論
コミュニケーション・システム
夢を描く
近代社会と意味喪失
医療を支えるもの
1996 年度
差異化の一考察
新聞記者という職業
新聞社主催の展覧会
昭和初期マルクス主義とオリエンタリズム
旧ユーゴスラヴィア地域の民族問題

1997 年度
ミシェル・フーコーの主体化の理論について
現代日本の市民運動とイデオロギーに対する考察
競争社会を考える
言語行為論に関する考察
選挙制度史の研究
行為の軌道
京浜工業地帯に見る戦後日本の社会変動
男女の「平等」とは
外国人労働者の目、日本人の目
脳死と臓器移植
市民運動の発展と展開
1998 年度
ピエール＝ブルデュー研究
アメリカにおけるアジア系移民
マージナル・マン
現代における大衆写真の変遷
社会科学の方法論的基礎についての研究ノート
人間集団と生物集団のルール
何のための消費
1999 年度
代表制の再検討
東南アジアの貧困による労働力
日本的市民像の研究
東京臨海副都心問題を考える
ファッションは何を語るか
性というディスプレイ
こころの距離・からだの距離

テレビゲームに関する社会学的考察
2000 年度
失業から再雇用へ ー失業問題の現局面と雇用保険
＜階層＞の現在
新中間大衆論による住民投票運動の考察
相互了解によるアイデンティティの確立
現場からの教育改革
日本社会における＜能力＞主義
現象学と現象学的社会学
2001 年度
IT 革命とは何だったか
＜家族＞の問題としての少年犯罪
社会とサブカルチャーの乖離
コンビニエンスストア論
暴力論
摂食障害とマスメディア
ー理想的ボディ・イメージが生み出す＜予備軍＞たち
性同一性障害に関する社会学的考察
ー心と体の性不一致を＜障害＞とみなす社会に生きる
ヤクザ映画の分析
＜お受験＞の提起する問題
ー文京区幼女殺害事件から考える＜お受験＞
少年犯罪に関する考察
死刑制度と社会 ー存置論と廃止論のはざまで
日本的経営と雇用制度
ー豊かな社会を保証する雇用制度の確立をめざして
2003 年度
リスク論 ー自己決定、自己責任社会の考察
イデオロギーにみる21世紀の新しい世界秩序

東京郊外に見る歴史の終焉
ボクたちの失われた十年 ーレコード大賞にみる過去十年の若者文化
日本におけるギャンブルのあり方について
2004 年度
自然と<もの>と人間 ーフリーマーケットから考える現代社会と環境観
家族の中の子ども
オタクの<世界> ー世界観とコミュニケーションから見た<オタク>
2005 年度
越境する文化と融合する文化 アジアと日本の移民の現在
会話終了時の要因の考察 ー「笑っていいとも」に見る集団談話の予期せぬ終了要因
市民社会を問う
日本とスポーツ プロ野球チームの行方
キャリア形成の変遷とそれにとまなう人生選択の変化について
国際社会への理性 ー国際法の可能性についての考察
女性の社会進出とリーダーの存在
「社会不安における媒介者の作用」
「自閉症の社会 ー自閉症の相互行為についての考察」
東京都知事 ー石原慎太郎
2006 年度
企業人のメンタルヘルス
ミュージカルから見る日本社会
早稲田大学のサークル活動にみる集団の変化
まなざしの内閉化
宗教社会学序説 ー神の比較社会学
テロ、テロとの戦争

排除と内包　—社会における都市下層
結婚論　—日本における結婚
<萌え>の誕生　—<萌え>現象から考える日本社会
大阪の盛り場　—キタ・ミナミ
美術家Mのまなざし —森村泰昌と、日本の現在を見る
共同体論序説
草の根交流の展望 —北東アジア外交に見る外交絵図の発展可能性
インターネットが拓く政治的公共性
2007 年度
矛盾する子どもたち　—<死ね>という言葉に見るパラドクス
若者による地域活性化の可能性　—アトム通貨を事例として
格差と若年者雇用システム
移民と共同体
観光行政と世界遺産
団塊女性についての考察
道德教育の推移と展望に関する一考察
男女共同参画社会のゆくえ
ジェンダーからみた現代家族のイメージ
若年者雇用の問題
2008 年度
今、クラシック音楽の<硬さ>とは何か？
アメリカ同時多発テロからみる報道と映画の関係
プロ野球監督の社会学
<読者>の分岐点
場所をアピールすること

1988 年度
日本の自殺の動向とその背景
日本の少数民族問題・アイヌ民族について
戦国武将の歴史的意義に対する一考察
山谷考
1989 年度
母性保護をどうみるか
広告の記号表現と記号内容
仕事か結婚か
写真業界における女性労働力の位置づけ
『M. ウェーバーの方法論から』
1990 年度
男性論
社会民主主義のジレンマ
NHKカメラマンの見た報道
子どもとテレビ
1991 年度
日本人の言語生活について
日本的経営の中の同族原理
くるま論
集団原理としての幻想観念
マックス＝ウェーバーの方法論について
1992 年度
現代日本社会における人間関係
アドルノ、社会観相学、図像化禁止
1994 年度
暴走族について
競馬の社会学

宗教社会学とその理論についてーバーガーの世俗化を中心にー
1995 年度
自己と他者
テレビにおける公正中立
近代における「楽園」
たばこ広告のうつりかわり
1996 年度
シュルレアリスムの成立
偉大なる必然
牛肉の社会環境論
刑法における喧嘩と違法性阻却事由とについて
1997 年度
まなざしと自己
「つながりの交叉」からの反抗
1998 年度
自己滅却と再生
逸脱行動からみる日本社会の独自性
旅の社会学的考察
「再生産論」におけるジェンダーの位置づけ
消費社会における個人主義の意味
1999 年度
官僚制の研究
2000 年度
ニューメディアコミュニケーション
少年問題と社会化
2004 年度
地域社会におけるJリーグクラブの可能性
2005 年度

日本におけるカジノの必要性 —日本のギャンブルの<いま>と<これから>
現代社会における権力と暴力について
2007 年度
ハーバーマスとルーマンのコミュニケーション理論の統合を 目指すための予備的考察
2008 年度
中流意識の中の格差社会
格差社会と日本の将来

文化構想学部

2010 年度
日本における企業のあり方 —近世から現代までの流れを考察する
共生空間における責任の所在の調査と考察 —ゴミ問題を題材として
交通と歴史 —交通の蓄積が引き起こす交通問題
環境と経済の統合による構造改革 —排出取引導入後の日本経済展望
存在の数学的基礎付け —モナドによる、諸科学の総合のための論
ごみ問題と循環型社会 —三主体による円滑なサイクル
SNS の自己と他者 —6 次の隔たりを目指して
「メディア論」から現在をみる —今を生きる私たちにとってのメディアとその関わり方
歴代都知事から見る臨海副都心開発 —巨大都市開発の何に原因があったのか
葬墓制からみた無縁社会
日本における集団主義 と個人主義 —日本の基軸を考える

マイケル・ジャクソン — スーパースターになりえたその理由
大潟村の今から日本の稲作農政を考える
デフレ現象に関する消費社会論的考察
2011 年度
日本における企業のあり方 — 近世から現代までの流れを考察する
病いの甲殻 — ハンセン病快復者 M さんのライフヒストリ
交通と歴史 — 交通の蓄積が引き起こす交通問題
中国社会体制の展望と日本の在り方
男女共同参画社会と日本人の消費傾向
松下幸之助の「日本論」を再検討する — 日本の伝統精神と「2010 年」の日本
情報化社会と近未来展望を考える
自殺と日本社会
ジャニーズ事務所のマーケティング戦略と消費者行動
事業仕分けを考える — 中小企業大学校の事例より
Observe 日比谷公会堂
情報環境と討議の枠組み — インターネットは「右傾化」しているのか
外国人労働者の現状と今後の展開
新社会経済システム構築論 — 市場経済と成熟社会の共生
2012 年度
雇用の均等化 — 女性雇用とワークシェアリング
人間の非合理性及び世界の不確定性とその克服についての考察 — 金融危機から見える物事の構成要素と人間の本質
『国産は安全で、外国産は危ないのか』

政治家とマスメディア —マスメディアを介した小泉政権のイメージ戦略への考察
日本におけるソーシャル・エンタープライズ —事業型 NPO 台頭の背景とビジョン
トヨタとホンダの企業理念に見る自動車産業の展望
日本の航空業界の現状と展望 —空の自由化と LCC 台頭の脅威
今後の教育政策路線 —新しい能力の向上は可能か
石橋湛山論
強い弓道部の作り方 —学生弓道を振り返って
選挙制度の再考 —民意とは何か
化粧社会 —化粧意識の把握のために
絆と無縁社会
Third Culture Kids の現状と展望 —トランスヒューマンとして生きる、他の誰でもない「私」
子どもが減っているという事実を考える —少子化の裏にある社会的背景
2013 年度
いじめと集合意識 —FFS理論の見地から
バラク・オバマの選挙戦略と民意の反映
ごみ処理施設と NIMBY 問題 —小金井市のごみ処理施設問題と日野市の反対運動を考える
日本におけるライフコースとリスクの関係についての一考察
高齢者雇用と若年者雇用の共存を考える
ジェネリック医薬品と先発医薬品メーカー —ジェネリック医薬品から見た日本の製薬業界
猪瀬直樹論 —作家都知事の相貌

集団とは ―未来の集団は機能するのか
現代日本における長時間労働
日本人と雇用の流動化 ―労働の市場化と日本人は共存できるのか
余暇活動の動向と在り方 ―大衆娯楽的観点から考察
2014 年度
石原慎太郎シンドローム ―日本にとって石原慎太郎はどういう存在なの
世界に誇る日本人らしさとは ―日本人の同調行動と観光立国
『監獄の誕生―監視と処罰―』 ―ミシェル・フーコーの思考をたどる
「生」を支える寺 ―妙光寺 25 年の歩み
人と犬猫の共生社会 構築論 ―日本の 犬猫殺処分 問題を 追究する
日本の「就活」における諸問題の検証 ―近年増加している就職活動生の自殺問題を発端として
「脱・武士道化」する日本人 「脱・武士道化」する日本人 「脱・武士道化」する日本人 ― 日本の道徳教育変遷を辿る
How Does Financial Transaction Destroy Human Mind? ―From Wall Street's Greed and Illusion.
日本のグローバリゼーション
世界に誇る「おもてなし」
ブラジル日本語教育の現状と課題
日本の戦後知識人とその思想 ―「ねじれ」から考える戦争責任
日本の奨学金制度リスク
A Case Study of Immigrants

日本の家族変化とこれから
戦後社会と若者のメンタリティの関係 —1960年代から90年代までの考察
現代家族のつながり —つながりに代わるもの
知的障害者が働くとは —企業就労と福祉的就労のはざままで
2015年度
都議会でたどる新銀行東京
ドイツ社会民主党と日本社会党の綱領比較 —社会体系論を中心に
同性婚のゆくえ
白洲次郎と戦後日本の構築 —先見性とは何か
SRI 投資信託が持つ「使用価値」の可能性
地域ブランドを活かしたまちづくり —地域の持続的発展に向けて
幸福度研究とオリンピックの期待値測定 —オリンピックは日本を幸せにすることができるのか
日本的経営の継続と適応
自動車産業の今後 —トヨタ自動車の未来を考える
戦後の公共事業を評価と今後の公共事業の展望 —公共事業はなにをすべきか
日本におけるブランド戦略の諸問題
今後の地域活性化の展望 —地域活性化における地域金融機関の役割
リスクと文化 —Mary Douglas and Aaron Wildavsky 『RISK AND CULTURE』を邦訳する
観光立国シンガポールから考える日本の未来とは —一代で経済大国を築いた指導者リー・クアンユーの声とともに

情報社会におけるマスコミ、テレビの価値とは —メディアの将来を考える
インターネット世界における「無料」がもたらしたもの —入手と提供における姿勢の変化
2016 年度
現代の二重構造と人手不足
東日本大震災復興計画のあり方
今後の地域活性化の展望 —地域住民の地域社会への参画について
「Tokyou2020」と都市「東京」
現代メディアによる社会的同時世界の変容
2000 年代における大手電機メーカーの変遷
暴力のコミュニケーション —青少年少女たちの変遷
難民と社会 —〈欧州難民危機〉とドイツ社会
人工知能(AI)の実用化による社会の変革
民放ネットワークとコンテンツから見る地方局の展望
フィンテックによる金融革命 —銀行は必要なくなるか
ネット炎上の現在 —ソーシャルメディアを介した集団極性化とその制御について
「フラガール」とは何者か —〈観られる〉ハワイとスパリゾートハワイアンズ
日本の「財力」の行方
地域社会における公共交通の今後 —LRT の導入を踏まえて
教育改革と高校性の進路形成 —〈自己実現〉という幻想
2017 年度
出版不況の中での書店のあり方

対立と隠蔽の産出 —在沖米軍基地の諸関係の総合「オキナワ」社会
天皇の位置の変遷 —憲法と天皇・皇室の行為から見る
教員のスクールソーシャルワーカーに対する認識を如何に変えるか
人口知能行為の社会学的理論構成と社会規範 —人間と機械の差異をめぐる共生理論
新しい万国博覧会の姿 —21世紀型万国博覧会の検討
イレズミを通して見る日本社会と共生
Post-Truth 時代における情報のあり方 —分断に混乱するネットワーク社会
婚姻と媒体「愛」・「法」・「権力」
2018年度
大川小学校の事例から考える災害対策の在り方
これからの日本社会における宗教役割
私たちと社会的世界 —アルフレッド・シュッツの『社会的世界の意味構成』をもとに
貨幣商品説の優位性 —21世紀日本における貨幣と銀行のあり方
現代日本における死と他者に対する認識 —葬儀・供養形態の変遷か
人と大麻・国家と大麻 —共生と日本的経営
現代の公共的空間の可能条件 —韓国 #MeToo 運動を析出する、声の環境と文字の環境
ソーシャル・キャピタルと持続可能な発展 —両者の関係と展望を探る
日本的経営と人間中心主義
笑えない社会

マルセル・モース『贈与論』を核とした一考察 — 互酬性が発生し機能する理論とその発展可能性
リスクと相互扶助 — 日本 の 保障体系の課題と新体系の構想
シンギュラリティ時代における社会構造の在り方
VR の未来 — 現実世界 VS 仮想現実
2019 年度
東京スカイツリーは電波塔か？
透明な医療のために — 新しい医療事故対策の提案
病める社会 — 宗教の機能不全と自殺率の上昇
「人を活かす組織」についての考察
日本における結婚・家族の変容
人間が人間であるということ — アンドロイドとの比較から検討する
ホログラムとセキュリティ
アスベスト
日本の選挙における新しい制度の考察
日本における社会保障とベーシック・インカム 導入への道
蓄積するアイデンティティ — 中国残留孤児のライフヒストリー
炭素税の分配的正義 — 日本社会における炭素税制度のあり方を考える
現代における社会とは何か — 近代化及びその帰結としての 情報化社会を例に
2020 年度
ライブハウスのありか
社会における「生産・消費」の変化と「流通」の新たな価値
日本におけるハンセン病政策の分析

—ミッシェル・フーコーを手がかりとして
Crypto Currency & Central Bank Digital Currency & Central Bank Crypto Currency
コロナ禍の世界
関係の選択化と親密性の変容 —現代日本における親密性のゆくえ
韓流ブームとその女性ファンによる日韓関係への影響
2021 年度
日本の SDGs について —現状と環境経済学の視点を受けて今後取り組みを加速させるには
日比谷は「世界劇場街」になれるか —Broadway と West End から考える世界劇場街 Hibiya の可能性
Play to Earn
日本の象徴 —天皇制のこれからについて考える
現代人と共感 —コロナ禍における SNS の利用から
「NHK らしさ」から考える日本の公共放送の将来性
現代社会・コロナ禍における幸福 —若者が幸福になるためには
失敗の本質 2021 —終わりのないコロナ戦争と新しい日常
プラスチック問題とドイツに学ぶ環境先進的社会
メンバーシップ型雇用とジョブ型雇用の比較と分析 —日本の労働問題解決に向けて
日本におけるヒップホップの立ち位置
2022 年度
若者の自己肯定感と幸福度の相関？ —私たちがより幸せに生きていくには

地方移住を成功させるための鍵 —若者の地方志向の高まりを考える
地方自治体における平和事業再考
ペットと共に暮らすこと —動物の歴史と保険の視座から
Z世代の消費行動特性から分析する レトロブームの加速要因
〈やまゆり園事件〉から考える多様性のある社会
AI が人類を超える未来 —AI 時代に求められること
男性の化粧が指し示す未来とは
テクノロジーの進歩とこれからの雇用
印西市政から考えるベッドタウンの今後 —若者の流出を防ぐために必要な政策の検討
ストリートファッションとの関係性から考察する —2022 年の〈オタク〉コミュニティ
広告に代わる新たな Web 収益源の可能性
日本におけるサードプレイス論
〈家〉の痕跡 ?家族のかたちを捉えなおすには
2023 年度
VTuber の未来展望 —文化、経済の観点から
E スポーツが日本に浸透するために
タワーマンションの流行と共同体の関係について Percent for Art の展望
パブリックアートと Percent for Art の展望
鉄道業界が抱く MaaS への希望
エーリッヒ・フロム —人間にとっての自由・愛とは何か
メンバーシップ型雇用とジョブ型雇用の比較分析 —日本的〈能力〉主義が引き起こす諸問題

E サリオはディズニーに追いつけるかスポーツが 日本に浸透するためには
クオータ制は不平等か？—政治分野の性別クオータ制の是非
SNS 文化がもたらした過度なルッキズム社会の果て
小学校道徳教育の過去・現在・未来 —変遷・現状・提言
日本の救急医療の実情と展望 —奈良県の事例と ER 型救急について
競走馬のセカンドキャリア・サードキャリアを考える
Society5.0 で実現する社会とはを考える

修士論文

1987	副査	フランクフルト学派としてのハーバーマス
1988	副査	オリエンタリズムと近代
	副査	科学社会学における「発見」概念の考察
	副査	シュッツ初期草稿についての考察 —『生活諸形式と意味構造』を中心に
	副査	A.シュッツのレリバンス論の体系と地平の解明
1989	副査	ディスコミュニケーションの社会理論
	副査	アルチュセール以降のイデオロギー／ ヘゲモニー論の問題設定
1991	副査	オートポイエシス・社会システム論について —ルーマンの社会システム論の総体的解明 に向けて
1995	副査	タルコット・パーソンズにおける 「システム」概念の考察
	副査	現代日本の大企業のホワイトカラーの労働エートス
1996	副査	国民国家と歴史教育の再帰的關係について —戦後日本の歴史教科書知識の再検討をふまえて

	副査	戦後のマスメディアにおける「主婦」の意味の変容 —『朝日新聞』の「主婦」記事の検討
	副査	シュッツ初期草稿についての考察 —『生活諸形式と意味構造』を中心に
1997	副査	科学社会学における「発見」概念の考察
	副査	シュッツとルーマンにおける<意味>概念の比較 —両者の<意味>概念の解明と比較への展望
1998	主査	J・ハーバマスのコミュニケーション的行為論の 理論的手法をめぐって
1999	主査	ニクラス・ルーマンにおける社会システム理論と 時間の関係
2000	副査	社会科学における情報論的アプローチ再考
	副査	科学社会学における「発見」概念の考察
2001	副査	Typik und Pragma —類型性と実践
2002	主査	超越論的論法の構造と機能
2004	副査	歴史的出来事をめぐる複数の記憶 —アウシュヴィッツ・ミュージアムにおける 見学者の理解可能性と理解不可能性
2005	主査	消費社会と宗教
2006	主査	グローバリゼーション論 Jurgen Habermas の理論的視点による グローバリゼーション論
	副査	ゲオルグ・ジンメル社会学理論 —その特徴と変遷
2008	副査	まちづくりと新しい文化的実践の定着 —阿佐谷ジャズストリートの事例調査から
2009	副査	フーコーと国家 —権力関係論における国家の位置

フィールドとアーカイブ
—社会理論構築と経験的社会研究
タルコット・パーソンズ後 50 年
あるいは、ある大学教員人生

発行 2024 年 10 月 1 日

発行人 森 元 孝

非売品